

富山県魚津市

山下Ⅱ遺跡発掘調査報告書

1997

魚津市教育委員会

序

魚津市は丘陵部とそれに続く開析扇状地が海岸近くまで張り出してお
り、平野部は狭いが、広い洪積台地は先史時代の遺跡が多数分布す
る絶好の環境となっております。そのため、古くから縄文時代遺跡が
注目され、発掘調査も数多く行われてきました。

遺跡の発掘調査は、記録の残されることのなかった時代を知る上で
欠かせなく、原始・古代の歴史は考古学の成果が中心となっています。
近年では、原始・古代だけでなく、中世・近世の遺跡の発掘も郷土史
研究に大きなウエイトを占めるようになっています。従来では調査の
行われることのなかった平野部でも発掘調査が行われるようになり、
文献記録の少ない地方の歴史の解明も飛躍的に進んできました。

国道8号バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査がおこなわ
れた山下Ⅱ遺跡は、従来より遺跡の宝庫として知られている上中島地
区の洪積台地上に所在しており、中世の遺跡として登録されていま
したが、発掘調査の結果、縄文時代から近世にわたる様々な遺物が出土
し、この地域の歴史の空白を埋めるものとして注目を集めております。

この発掘調査報告書が地域学習の教材として多くの人々に活用され、
地域の歴史研究と埋蔵文化財保護の意義の理解に役立てば幸いです。

平成9年3月

魚津市教育委員会

例　　言

1. 本書は魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成8年度山下Ⅱ遺跡発掘報告書である。
2. 調査は建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受け、魚津滑川バイパス建設事業に先立ち、魚津市教育委員会が実施した。
3. 調査事務局は魚津市教育委員会社会教育課に置き、文化係が担当した。発掘の作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。
4. 発掘調査期間 平成8年10月28日～12月26日
5. 遺物整理期間 平成9年1月6日～3月26日
6. 調査担当者

試掘調査	越前慶佑	富山県埋蔵文化財センター
	麻柄一志	魚津市教育委員会社会教育課
本調査	麻柄一志	魚津市教育委員会社会教育課
	塩田明弘	魚津市教育委員会社会教育課

7. 本書の執筆は麻柄と塩田が担当した。遺物の実測、写真撮影は麻柄、塩田、富山大学大学院生近藤美紀がおこなった。このほか報告書作成にあたり、朝野万里子、浦田佳子、野村百合、佐々木友貴子がトレース、拓本、表作成等の作業をおこなっている。
8. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。
富山県埋蔵文化財センター 宮田進一、斎藤隆、越前慶佑
上市町教育委員会 高慶孝
9. この調査で設定した基準杭は国土座標を用い、水平基準は標高である。
10. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。



目 次

序	
例 言	
1. 調査の経緯	1
(1) 分布調査	1
(2) 試掘調査	3
(3) 本 調 査	5
2. 位置と自然環境	6
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	7
4. 層 位	8
5. 遺 構	17
(1) 柱穴状ピット群	17
(2) 土 坑	17
(3) 方形整穴状土坑	17
(4) 潟 [用水跡]	17
6. 出 土 遺 物	20
A. 土器・陶磁器	20
(1) 繩文土器	20
(2) 古 代	20
① 須 恵 器	22
② 土 師 器	22
(3) 中 世	22
① 土 師 器	22
② 珠 珠	24
③ 中国製磁器	28
(4) 近世（江戸時代）以降	29
① 肥前系陶磁器	29
② 越 中 磬 戸	30
(5) その他の陶器	34
B. 石 器	34
① 打 製 石 斧	34
② 磨 製 石 斧	34
③ 石 鐘	34
④ 刮 器	37
C. 金 属 製 品	37
D. 出土遺物のまとめ	38
7. 調査のまとめ	46
図 版	47

1. 調査の経緯

富山県を東西に横断する一般国道8号は、新潟を起点として北陸の主要都市を経由し、京都市に至る日本海沿岸を縱貫する幹線道路として、沿線地域の産業・経済の大動脈として沿線住民にとって重要な道路である。そのため交通量は多く、混雑解消のため、全線で整備がおこなわれている。魚津市内では全域でバイパス工事が計画され、1982年に魚津市江口～住吉間の分布調査が行われ、それに基づき、1983年に本江B遺跡の試掘調査、翌1984年に同遺跡の発掘調査が、1986年に友道神明社遺跡の試掘調査が行われている。魚津市江口～住吉間は暫定2車線で供用が開始されており、現在、魚津市住吉～滑川市稻泉の魚津滑川バイパスの用地買収及び建設工事が進められている。

(1) 分布調査

平成7年3月、建設省北陸地方建設局富山工事事務所は、富山県教育委員会に国道8号魚津滑川バイパス建設予定地の内半成8年度以降の事業実施予定地の埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会をおこなった。これに対し、富山県教育委員会は富山県埋蔵文化財センターを担当とし、魚津市教育委員会と合同で分布調査を実施した。調査は道路の設計及び杭打ちの完了している平成5年度分布調査実施地点の西南側の約1.2kmの範囲を対象とし、平成7年3月22日に行った。

調査担当者は下記のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター 企画調整課長 宮田進一

々 文化財保護主事 高梨清志

々 文化財保護主事 河西健二

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

この分布調査は、魚津市慶野、出、佐伯、吉野地内を対象に、路線内及びその周辺の表面採集を行うことで遺跡の確認を行ない、従来知られていた佐伯遺跡、山下I遺跡、山下II遺跡等の範囲確認に併せ、出地内及び吉野地内に2カ所の新遺跡を発見した。山下I遺跡はバイパスの路線から離れて位置しているが、遺跡の推定範囲の中で関連工事が予定されており、一応踏査をおこなった。その結果、関連工事の実施予定地は、約20年前に実施された圃場整備で地表面（黄褐色ローム層）深くまで削平された水田の畦畔で、工事は水田への搬入農道の設置なので、調査の対象外とした。

新発見の遺跡の名称は、平成5年度に実施した分布調査に習い、魚津滑川バイパスの略UNBをそれぞれに冠し、出地内の遺跡をUNB-2遺跡、吉野地内をUNB-3遺跡と仮称した(第1図)。UNB-2遺跡は出地内に所在するので、遺跡台帳には出遺跡で登録し、以後『出遺跡』と呼称することにする。また、UNB-3遺跡は吉野地内の所在なので『吉野遺跡』と称することにする。なお、平成5年度の分布調査で発見された遺跡はUNB-1遺跡と仮称し



第1図 山下II遺跡と周辺の遺跡 (1/10,000)

1 廣野遺跡、2 出遺跡、3 佐伯遺跡、4 山下道路、5 山下II遺跡、6 吉野遺跡

ていたが、慶野地内に所在するので『慶野遺跡』と呼ぶことにする。

山下Ⅱ遺跡からは土師器、越中瀬戸の破片及び鉄石英剥片が数点採集され、石器時代及び古代から近世の遺跡と考えられた。分布調査から推定された山下Ⅱ遺跡の面積は、約12,000m²で、路線内の面積は約8,000m²と推定された。山下Ⅱ遺跡は1970年代の前半に発見され、中世の遺跡として知られていた。発見の契機が圃場整備事業の工事によるため、今まで遺跡の詳細については不明だった。従来の遺跡地図では県道魚津堀江線の東側に遺跡が存在すると考えられていたが、今回の分布調査では県道を挟んだ東西に遺跡は広がっていると推定された。遺跡の現状は水田であるが、圃場整備で水田ごとにかなりの比高差が設けられており、地表からでも削平と盛土の跡が明瞭に認められ、遺跡の大部分に工事が及んでいることが予想された。

(2) 試掘調査

平成7年4月に分布調査の概要報告が富山県埋蔵文化財センターによって纏められ、この報告書に基づき、平成7年5月、建設省北陸地方建設局富山工事事務所、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、魚津市教育委員会社会教育課は、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、魚津市教育委員会が事業主体となってUNB-2遺跡、佐伯遺跡、山下Ⅱ遺跡の試掘調査を実施し、富山県埋蔵文化財センターから文化財保護主事の派遣を受けることになった。

この協議に基づき、平成7年7月魚津市と建設省北陸地方建設局富山工事事務所は埋蔵文化財の試掘調査についての委託契約を締結し、7月10日から9月1日までの予定で山下Ⅱ遺跡外2遺跡の試掘調査を実施した。

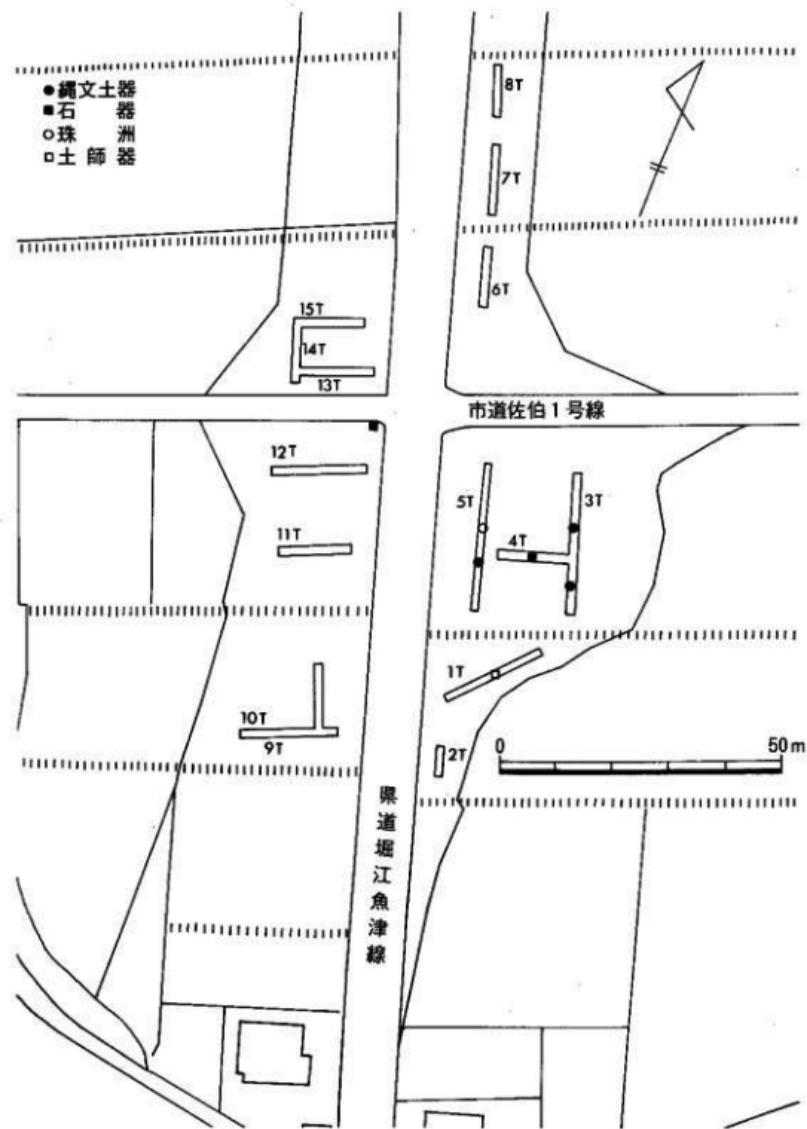
試掘調査の担当者は下記のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越前慶祐

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

試掘調査の対象面積は、分布調査で山下Ⅱ遺跡の範囲と推定された水田部分の内、8号バイバス建設に係る4,579m²である。試掘調査は重機を使用して耕作土を除去し、遺物包含層（黒褐色粘質土）を作業員の手で薄く剥ぎ取りながら、遺物の有無を確認した。掘削は黒褐色粘質土の下の黄褐色粘土層（ローム層）までおこない、黄褐色粘土層上面の精査は人力で行った。トレンチは地形や土地区分に合わせ、任意に15カ所に設定し（第2図）、掘削時及び廃土中の遺物の発見と収集に努めた。遺物は第1トレンチから第5トレンチまでの間の第2トレンチを除く全てのトレンチから出土し、遺物は縄文時代と中世である。

遺跡の層位は各トレンチとも約20cmの耕作土の堆積が認められ、第1～第8トレンチでは耕作土の下に暗褐色の粘質土が堆積しており、さらにその下に黒褐色の粘質土が認められ、黄褐色粘質土（ローム層）の堆積が続く。第5トレンチ南側と第1トレンチ西側では耕土の直下がローム層と黒褐色粘質土の再堆積層となっており、過去の圃場整備で大規模な削平があったことがわかる。第2トレンチと第3トレンチの地山面で遺構と考えられる円形の黒褐色土の堆積



第2図 試掘トレンチ出土遺物

が認められ、遺物の分布と一致することから遺構の蓋然性は高い。

出土遺物の主なものは、縄文時代では、縄文土器片が第3トレンチと第5トレンチから出土しており、縄文時代の石器（打製石斧）が第4トレンチから出土している。縄文土器は中期後半のもので、打製石斧もほぼ同時期のものと推定される。中世では土師器片が第1トレンチより、珠洲が第4トレンチから出土している。

また第12トレンチと第13トレンチの間の水田畦畔より頁岩製のスクレイパーが採集されているが、県道西側の第9トレンチから第15トレンチまでの3枚の水田は耕作土の直下に黄褐色の粘質土が堆積しており、過去に暗褐色粘質土、黒褐色粘質土を失わせる様な大規模な遺跡破壊があったことを示唆しており、本調査の対象範囲からははずしている。県道西側部分は東側より一段低くなっている、旧地形でも南から北に緩やかに傾斜している河岸段丘上の微高地に遺跡は立地しているといえる。なお、第11、12、13トレンチから川跡が検出され、砂層が一面に堆積していたが、遺物が出土しておらず、年代の決め手がない。しかし、付近の住民の証言により、約20年前の畠場整備までは、県道西側に水路が存在していたことが明らかになり、現代の水路跡と推定した。

これらのことより、分布調査で遺跡の範囲と推定された部分の南北約1,900m²が本調査の対象となり、遺跡の年代は縄文時代及び中世から近世にわたると考えられる。なお、耕作土中には近世、近代の陶磁器が含まれており、遺跡の形成が縄文時代に始まり、中世、近世、近代と連続的であったことがわかる。

(3) 本 調 査

試掘調査の報告に基づき、富山県教育委員会、魚津市教育委員会、建設省富山工事事務所では平成7年10月より協議を重ねた。その結果、バイパス建設工事を予定どおり進めるには、出遺跡を含めた工事予定地内の遺跡の発掘調査に平成8年度より着手しなければならないことは共通の認識となった。しかし、富山県教育委員会、御富山県文化振興財團、魚津市教育委員会のいずれも調査員の余裕がなく、現状では、発掘調査を受託できないことから、魚津市では平成8年4月より、発掘調査のための専門職員（博物館学芸員）を1名採用し、平成8年度の発掘調査は魚津市が実施することで合意した。

国道8号バイパス関係埋文化財の発掘調査は、平成8年度予算の成立の遅れから、平成8年6月3日付けで委託を受け、出遺跡、山下Ⅱ遺跡の発掘調査委託契約書を締結し、同日より着手した。調査は魚津市教育委員会社会教育課文化係に事務局を置き、下記の者が現地での調査を担当した。

魚津市教育委員会社会教育課文化係 学芸員 麻柄一志

々

塙田明弘

発掘調査はまず出遺跡から始め、出遺跡の終了後、山下Ⅱ遺跡は平成8年10月18日より重機による表土剥ぎを開始した。調査範囲はすべて現状は水田となっており、作業はまず重機で耕

作土約20cmと圃場整備の際の盛り土を除去した。その後基準杭打ち、休憩用プレハブ設置などをおこない、10月28日から、(社)魚津市シルバー人材センターから派遣された作業員による発掘作業を開始した。発掘作業は、試掘で地山とみなした黄褐色ローム層の上面まで手掘りで行い、黒褐色粘質土層中より遺物を採取し、黄褐色ローム層上面で遺構検出をおこなった。堆土にはベルト・コンベアーを使用し、出土遺物は1点ずつ原位置を記録し、取り上げている。発掘調査は最後の遺構実測を残し、途中降雪にも見舞われたことから一旦12月26日に終了し、その後翌年の平成9年3月20日から3月31日まで遺構実測等を行い、調査を年度内に終了させることができた。

遺跡は大規模な圃場整備が実施されていたため、本来の遺物包含層と考えられる黒褐色粘質土層が場所によってはほとんど失われており、また工事による黄褐色ローム層を含む再堆積層も認められ、改変の著しさが目立つ。

2. 位置と自然環境

富山県魚津市は富山平野の北東部に位置する。北東部は布施川を挟んで黒部市と、西南部は早月川を境に滑川市と接している。雄大な立山連邦からは僧ヶ岳を水源とする布施川、剣岳を水源とする早月川の他に、毛勝山から流れる片貝川や角川が市内を貫流し、富山湾へと注いでいる。山下II遺跡は魚津市の西部、上中島地区の佐伯地内に所在する。

角川と早月川に挟まれた洪積台地と沖積平野にまたがる地域は中島地区と呼ばれ、北側下流域が下中島地区、南側中・上流域が上中島地区に分けられる。出と升田を除き上中島地区の大部分は洪積台地上にあたる。山下II遺跡の位置する上中島台地は、河床面の低い角川に面して、下流の慶野地内まで段丘崖が発達し、河床面の高い早月川に面した段丘崖は中流域の上野地内で消滅しており、沖積面との境界は明瞭ではない。遺跡は台地上に位置するが魚津市の平野部は富山平野の中では幅がせまく、約1.5km北側に海岸線がある。そのため、洪積台地を含めた平野部の傾斜は比較的強いといえる。遺跡は角川に面した段丘崖に近いが、段丘崖からは約250m西側にある。

山下II遺跡の標高は35~37mを測り、地形は全体に南から北へ傾斜している。また、遺跡付近では東から西への傾斜が認められるが、この傾斜は遺跡の西側を流れる入川用水に対する傾斜と考えられる。南から北への比高差は約1.5m、東から西への比高差も約1.5mを測るが、遺跡周辺部が昭和50年代前半に圃場整備が行われており、旧地形の微地形は現況からは明らかでない。

遺跡の現状は水田であるが、用水が開かれて開田作業がおこなわれた江戸時代と、大規模水田へ圃場整備の行われた昭和50年代前半に地形の改変がおこなわれている。さらに、昭和前期に遺跡の西側に接し道路（現県道堀江一魚津線）が造成され、その際にも遺跡の一部は破壊されている。用水の掘削が進み、開田作業がおこなわれた江戸時代後期以前の遺跡周辺の土地用途は明らかでない。

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

遺跡の所在する上中島台地は、角川と早月川に挟まれた河岸段丘で、上中島地区の大半がこの台地によって占められている。上中島台地の西部には早月川の段丘崖が、東部には角川の段丘崖が走り、台地は南北に細長くのびている。上中島地区的遺跡はこの台地上が最も多く発見されており、特に角川の段丘崖にそって南北に遺跡がならぶ。

縄文前期・中期・弥生中期・後期・奈良・平安・鎌倉・室町の各時代にまたがる佐伯遺跡（第1図3）、縄文時代前期の山下遺跡（第1図4）、今回発掘調査した山下II遺跡（第1図5）、鎌倉・室町時代の吉野遺跡（第1図6）が並び、さらに南側には後期旧石器時代から中世までの複合遺跡で、広大な面積を占める早月上野遺跡がある。段丘の下に位置する出遺跡（第1図2）、慶野遺跡（第1図1）も地図上では角川の沖積地に見えるが、微高地で、沖積層に埋没した低位段丘か自然堤防の可能性がある。山下II遺跡の北側に接する山下遺跡は、現在は圃場整備のおこなわれた規格化された水田で、大規模な土木工事のために地表面からはその広がりが把握しきれない。可能性としてはほとんど連続に近い状態かもしれない。詳細な試掘調査や分布調査を行えば、佐伯遺跡、山下遺跡、山下II遺跡の境界はほとんどないと予想される。今回の山下II遺跡内の調査でも地表面まで削平された場所が何カ所も認められ、こうした場所では遺構等が確認できぬが、周辺の状況から遺跡の範囲内に含まれていた可能性が高い。

上中島台地上で最古の遺跡は、山下II遺跡の約1km南の早月上野遺跡で後期旧石器時代後半のナイフ形石器、搔器と石核、剥片などが出土しているが、出土量は少なく、1ブロックのみである（富山県教育委員会1973）。出土層準は黄褐色粘質土の最上部であり、上中島台地上には広くこの土層が堆積しており、同時期の石器群が他にも期待できる。縄文時代早期はかつて佐伯遺跡で押型文土器が出土している（富山県教育委員会1979）。前期は後葉の土器が佐伯遺跡と山下II遺跡で採集されており、中期以降は晩期まで早月上野遺跡に大集落が形成されており、佐伯遺跡や早月上野遺跡のさらに南に位置する升方遺跡などで中期の土器が出土している。弥生時代では佐伯遺跡に後期後半の集落が確認されており、早月上野遺跡と沖積地の出遺跡でも同時期の土器が出土している。古墳時代は空白期で再び遺跡が出現するのは奈良時代末からである。平安時代の集落としては佐伯遺跡が著名で早月上野遺跡、出遺跡で遺物遺構が検出されている。中世では台地上、沖積地に広く遺物が散布しており、慶野遺跡、出遺跡、佐伯遺跡、山下II遺跡、吉野遺跡、早月上野遺跡、さらに台地の南側に接する山地には升方城跡、水尾城跡、水尾南城跡などの中世山城が並ぶ。

ところで、遺跡の東に隣接して佐伯家がある。佐伯家は立山開山伝説の主人公、佐伯有頼の末裔と伝え、江戸時代は十村役や山廻役を勤めた豪農であるが、家伝では、元は布施郷の大山（現黒部市）に居館していたが、片貝川の氾濫で、鎌倉時代に天神山に移り、さらにその後松倉城主椎名氏と領地を換え、現在の地、佐伯村一村を領したとしている（魚津市史編纂委員会1968）。隣村の吉野には佐伯新佐衛門が慶長13年に眼病折願に小林村から勧請し、菩提寺としたといわ

れる四十万山託法寺があり、さらに佐伯家の墓地には江戸初期からの墓石が存在しており、中世末には佐伯家が佐伯村に存在していたようで、家伝に従えば、それ以前は椎名氏の領であったことになる。

また、古代の北陸道が、近世以降の海岸沿いでなく、上中島台地上を通っていた可能性が以前から指摘されており、周辺の遺跡との関連が注目される。特に台地上は北陸道に沿って遺跡が形成された可能性も考慮しなければならない。古代及び中世の遺跡分布が道との関係で重要な要素となるかもしれない。

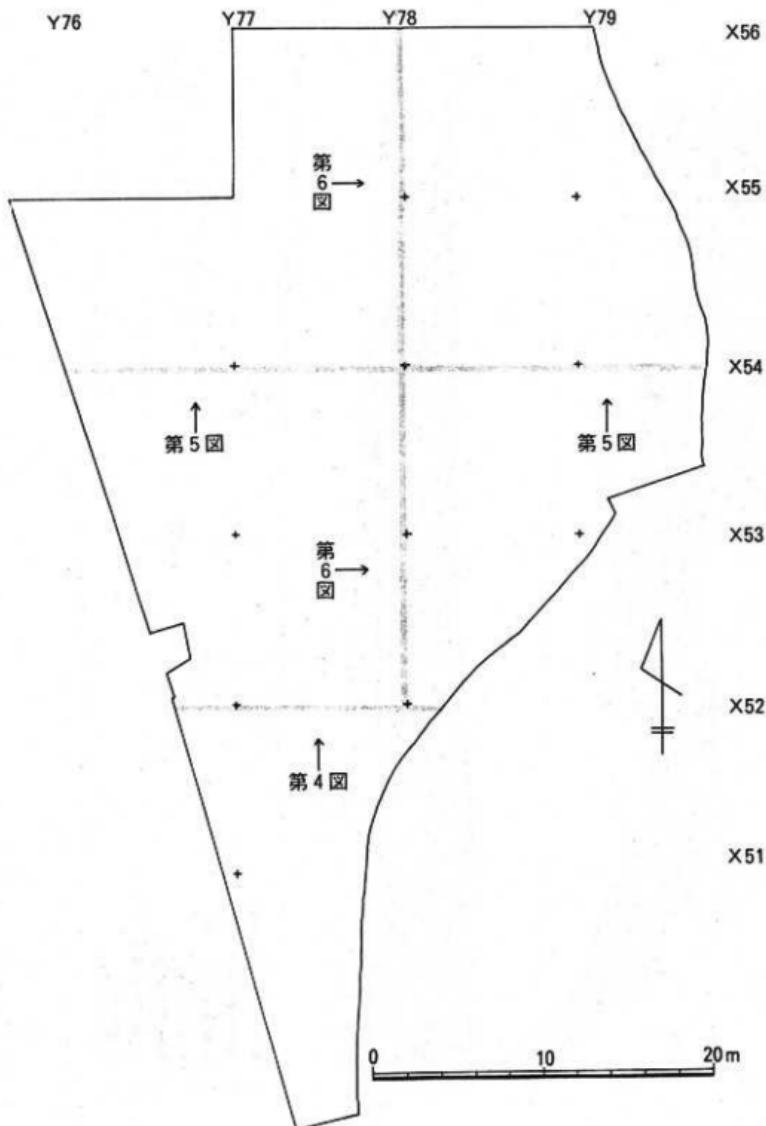
4. 層位

遺跡の層位は地点によって大きく異なるが、ほとんどが圃場整備による搅乱が原因と考えられる。代表的な土層図を第3図のとおり、南北及び東西ラインに沿って示すが、上部はかなり搅乱を受けている。なお、最上部は作業員の手掘り作業の前に重機で剥ぎ取っているため、本来の水田面は土層図上面より、さらに20~25cm高い。

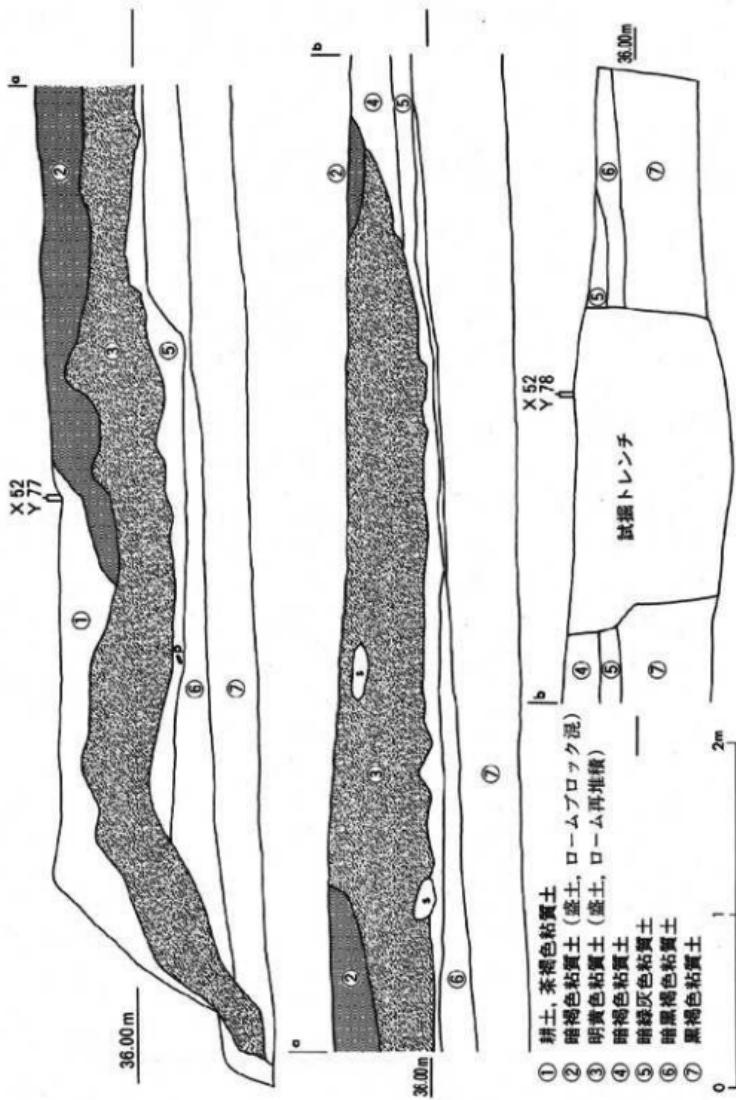
基本的な層序は上から水田耕作土、暗褐色及び暗灰褐色粘質土層（一部は床土の可能性あり）、黒褐色粘質土層、暗黄褐色粘質土層（漸移層）、黄褐色粘質土層（ローム層）の順で、第4図に示した南側の東西セクションでは耕作土の下に、圃場整備の際の厚い盛土である暗褐色粘質土、黄褐色粘質土（いずれもロームブロック及びローム再堆積土を含む。）が認められ、同様の土層は第5図の北側東西セクションの西側でも認められる。いずれも盛土は西側で厚く、東側では存在しない。位置と自然環境の項で述べたとおり、本来、遺跡付近の自然地形が東から西に傾斜していることから、圃場整備の際に水田面のレベルを統一したため、やや低い西側に盛土がおこなわれたものと考えられる。

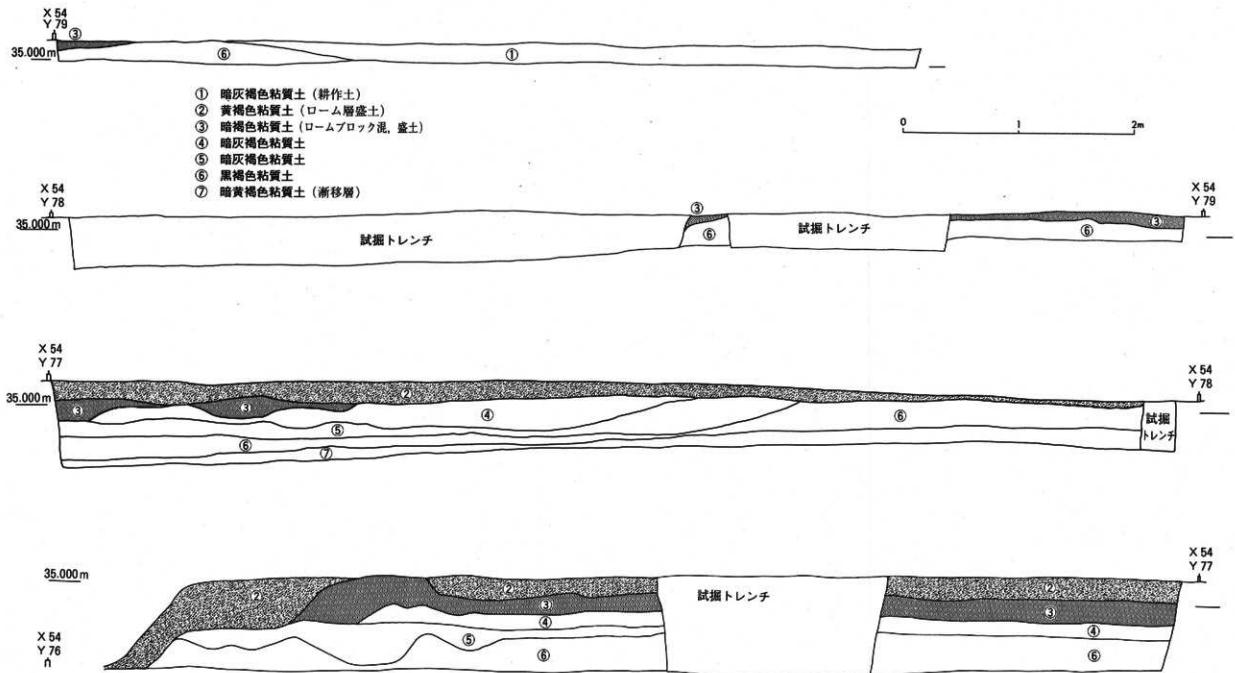
遺物は、耕作土より下で、黄褐色粘質土層（ローム層）または暗黄褐色粘質土層（漸移層）の上までの各層から出土しており、最下部の黒褐色粘質土層から縄文土器、石器、珠洲焼などが出土しており、この上部の層順でも大きな変化がない。黒褐色粘質土層の下部からも珠洲などの中世陶器が出土していることから、遺構面は1枚と判断し、黄褐色粘質土層（ローム層）の上面で遺構検出を行っている。

第6図のX53~54、Y78ラインの中央部に用水跡の砂質土の堆積が認められるが、この用水跡からは、縄文土器、打製石斧、珠洲、越中瀬戸、近世・近代陶磁などが出土しており、圃場整備前まで機能していたものと思われる。用水跡は第7図に見られるように発掘区の中央部を南東から北西に流れている。また、第6図X56 Y78付近に砂質土の堆積が認められ、発掘区の外側に広がっている。この堆積も小河川の跡と考えられるが、出土遺物は少なく、年代も近世以降のものと考えられる。この河川の流れは東から西である。

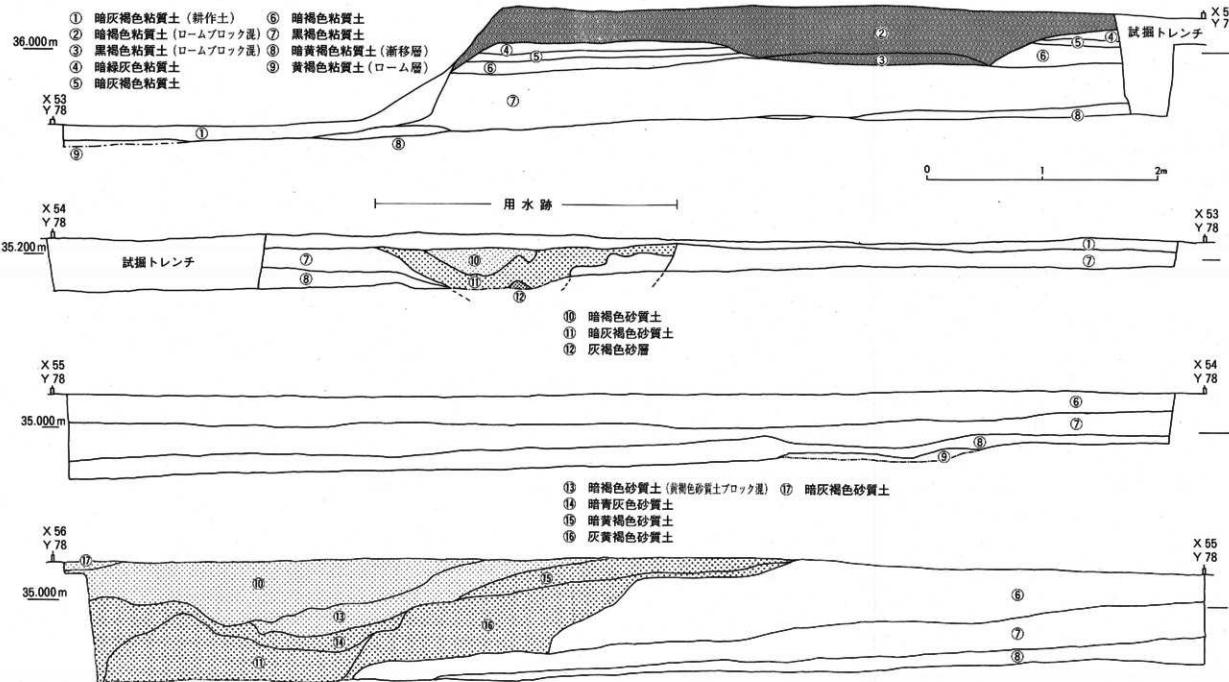


第3図 土層図位置





第5回 層 序 X54列



第6図 層序 Y78列



第7図 造構配置図

5. 遺構

本遺跡において検出された遺構は、柱穴、土坑、方形堅穴状土坑、溝（用水跡）である。遺物が出土した遺構は溝のみである。埋土より、縄文土器から近現代までの陶磁器片が多数見つかった。その他の遺構については明確な時期は不明である。

(1) 柱穴状ピット群（第8、9図、図版7、8）

ピット群は調査区南端部（第7図）と北東部（第8図）において検出された。特に北東部は集中して見られるが、掘立柱建物の復元は出来ない。ただ、横列と思われる、一列に並ぶピットが僅かにある（第9図、SP01～04）。ピット群の径は約20～50cm、深さは10～30cmを測る。大きさは多様であるが、径約20～30cmのものが多数を占めている。またこれらの中には埋土の堆積状況などから所属時期が比較的新しいものがあり、稻掛けに用いたはさ穴の可能性がある（第7図SP05～08）。北東部のピット群の周辺出土の遺物は縄文土器が多いが、中世、近世のものも分布しており、時代を特定することはできない。

調査区南端のものは、柱穴状ピット群の周辺より、第25図の出土遺物分布図のように縄文土器が多く出土しており、縄文時代の可能性が高い。出土した縄文土器は多くは粗製土器であるが、条痕土器など縄文晩期のものが存在しており、また打製石斧なども出土していることから該期の平地住居などの可能性もある。

(2) 土坑（第7図、図版9）

土坑は調査区北部と南部において合計14基検出された。遺構内から遺物は出土していない。そのうち、SK01は調査区北部で検出した。最大径2.0m、深さ約30～40cm、楕円形を呈する。埋土はローム土混じりの暗褐色粘質土である。遺構内には20cm程の礫が10個見られたが、意図的に配されたものではなく、廃棄したものと考えられる。遺物は出土していない。

(3) 方形堅穴状土坑（第7図、図版10）

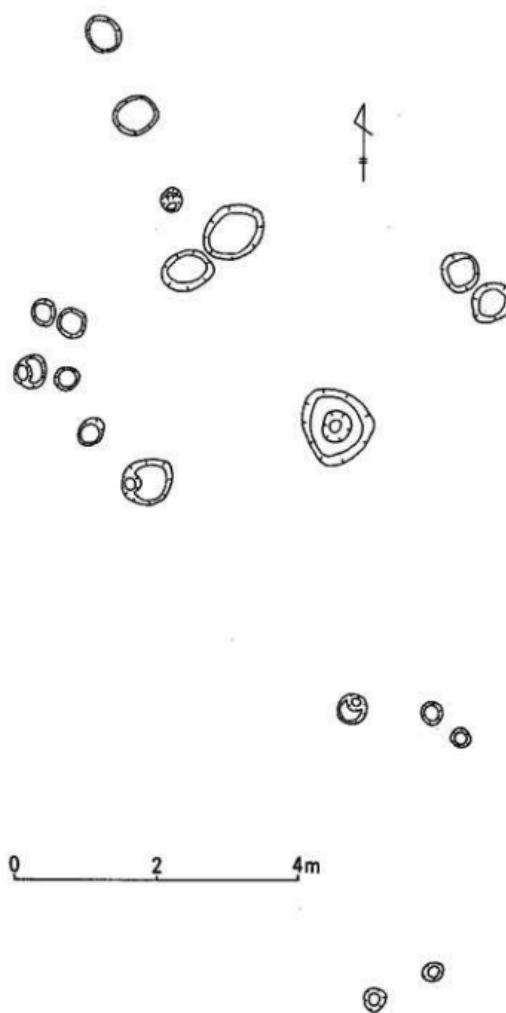
SK02は調査区北東端部で検出された。3.5m四方のほぼ正方形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土はローム土混じりの暗褐色粘質土で、しまりが弱く埋没してからさほど時間が経っていないと思われる。床面には30cm大の礫が2個見つかった。出土遺物は無く、明確な時期や用途は不明である。

(4) 溝【用水跡】（第7図、図版11、12）

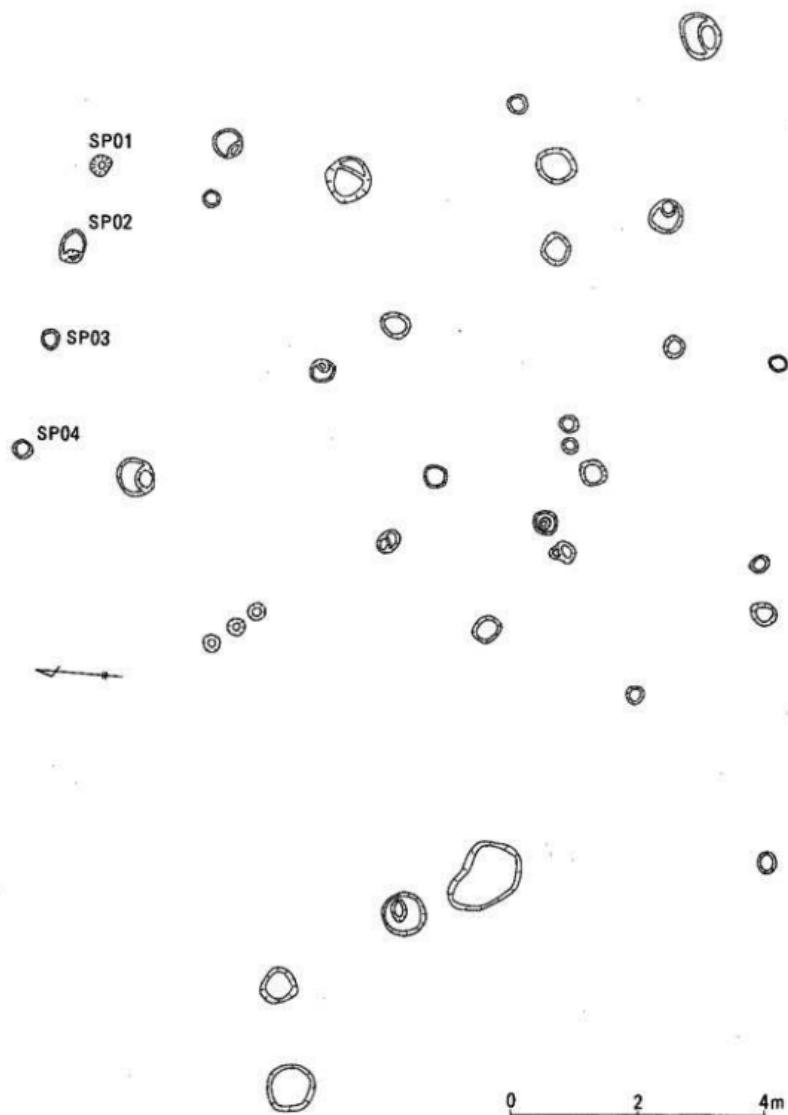
調査区中央部の南東から北西にかけての溝と、南西部から北東部にかけての溝とが直交する形で検出された。幅約50cm、深さ20～50cmを測る。遺構は黒褐色粘質土から掘り込まれており、灰褐色砂層、暗灰褐色砂質土、暗褐色砂質土と堆積している。検出できたのは地山面である黄褐色粘質土であったため、実際の形状より小さい。ただ第6図の層位図から、実際の大きさは幅2.6m、深さ約60cm程であったことがわかる。溝の壁面には木杭がほぼ等間隔に打たれてお

り、土止めとして用いたのであろうか。また調査区南東部付近の溝には、30cm大の礫を脇に埋め込んでいた。埋土からは縄文土器や石器、珠洲焼の体部破片、越中瀬戸焼や肥前系陶磁器の碗、皿、擂鉢、磁器製の人形、ガラス片、瓦、土管、近現代陶磁器の碗や皿などが多数出土した。遺物は摩滅が著しいものとそうでないもの、全く摩滅していないものとがある。用水は近

現代のものと考えられ、耕作時に出土した遺物を投げ捨てていたのであろう。



第8図 柱穴状ビット群(1)



第9図 柱穴状ピット群(2)

6. 出土遺物

出土遺物は近世・近代の用水跡から出土したものを除けば、包含層、盛土からの出土で遺構に伴うものはない。第25図～第31図に各種出土遺物の分布図を示したが、いずれも発掘範囲に散漫に分布しており、遺構との結びつきを示すようなものはない。ここでは、時期別に出土遺物を説明する。

A. 土器・陶磁器

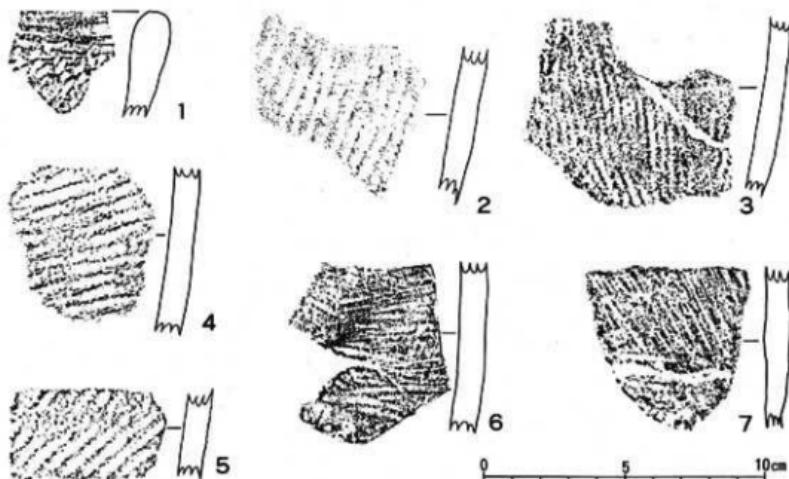
(1) 繩文土器 (第10、11図)

縄文土器は総計で110点余りと、出土遺物のなかでは最多である。いずれも小破片で出土しており、器形等の判別できるものはない。また、表面の摩滅が著しいものが目立ち、紋様の判別出来ないものがある。包含状態が良好とはいえない。

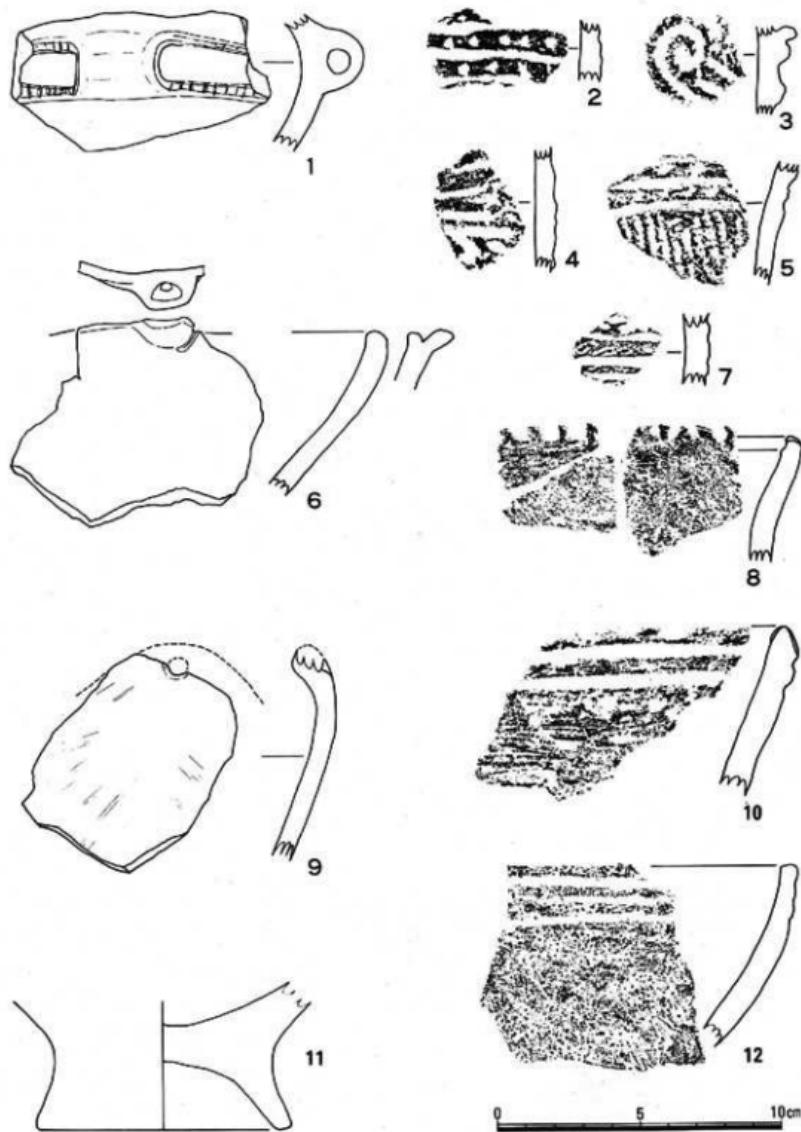
縄文土器のなかで、最も多いものは無文土器で、次に縄文のみのものである。第10図1～5は縄文部の破片、6、7は条痕文の破片である。有文の破片は10点余りにすぎない。第11図1は中期後半、同2～5は後期前葉のもの、同7、8は後期後半と思われる。同10、12は晩期に属する。また、11は中期の高台付きのもである。6は口唇部に太い刺突のある瘤が付けられた浅鉢形土器である。

(2) 古代 (奈良・平安時代)

出土した遺物は須恵器と土師器の体部破片2点のみである。ともに包含層出土である。時期



第10図 縄文土器(1)



第11図 繩文土器(2)

は不明である。

① 須 恵 器 (第12図)

1は須恵器壺の体部破片であろう。外面に平行叩き、内面には同心円文を残す。

② 土 師 器

2は土師器壺の体部破片であろう。外面には平行叩きを施す。

(3) 中 世 (鎌倉・室町時代)

① 土 師 器 皿 (第13図)

全て包含層からの出土である。遺物の年代観は宮田進一氏の編年に依拠した。所産時期は13世紀から16世紀まで確認出来た。

1は体部が直線的に開き、口縁部に一段の横撫で調整を行う。口縁端部を面取りし外傾させている。黄橙色を呈し、焼成は良好である。13世紀代に位置づけられる。

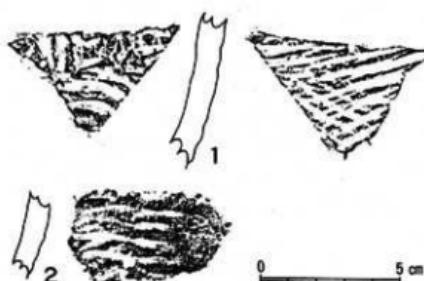
2は口径9.0cm、器高1.7cm、底径6.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を僅かに上方へ挽き上げている。乳白色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。13世紀代に位置づけられる。

3、4はほぼ同形態のもので、口径はそれぞれ13.4cm、13.8cmを測る。体部は直線的に開き、一段の横撫で調整を行う。4は端部の面取りを行い、撫で調整も丁寧である。灰白色を呈し、焼成は良好である。13世紀代に位置づけられる。

5は口径12.0cm、器高2.1cm、底径8.0cmを測る。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。体部中位に一段の横撫で調整を行う。体部の器壁は薄く、口縁部に至りやや肥厚する。灰白色を呈し、焼成は良好である。13世紀から14世紀代に位置づけられる。

6は口径7.8cmを測る。内湾しながら立ち上がる器形で、端部を尖らせる。黄橙色を呈し、焼成は良好である。14世紀代に位置づけられる。

7は口径12.0cmを測る。内湾しながら立ち上がり、口縁端部外面と内面に横撫で調整を行う。灰褐色を呈し、焼成は良好である。14世紀代に位置づけられる。



第12図 須恵器・土師器

8は口径9.8cmを測る。やや内湾気味に外方へ短く立ち上がる。内面に撫で調整を行い、平滑に仕上げる。黄橙色を呈し、焼成は良好である。14世紀代に位置づけられる。

9、10はほぼ同形態である。口径はそれぞれ14.6cm、8.2cmを測る。体部は直線的に開き、端部を鋭く尖らせる。灰白色を呈し、焼成は良好である。14世紀から15世紀代に位置づけられる。

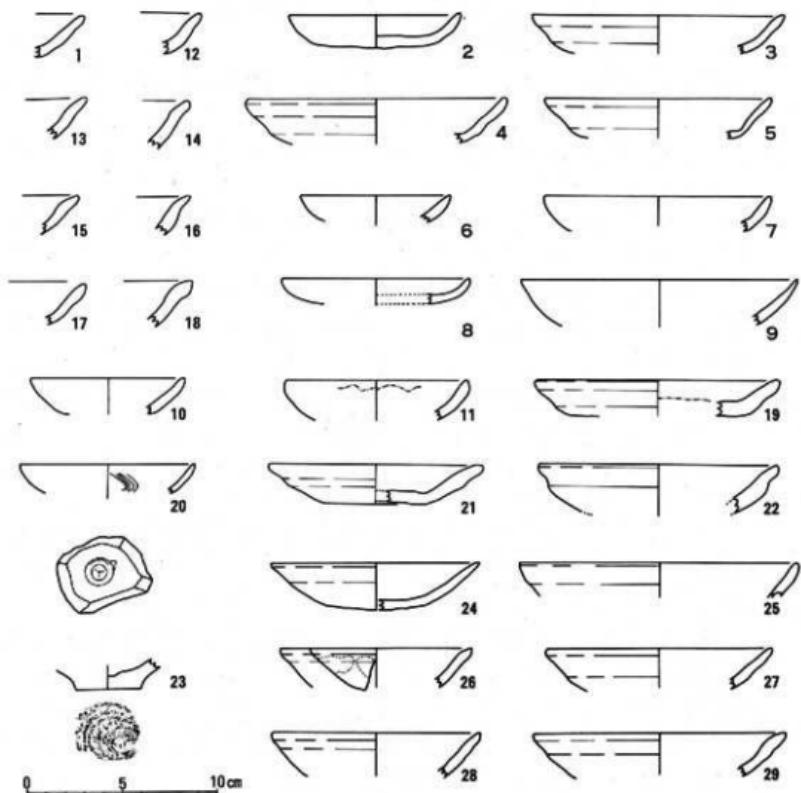
11は口径9.5cmを測る。内湾気味に立ち上がり、口縁端部外面と内面に横撫で調整を行う。端部内外面には煤、タールの付着が見られる。黄橙色を呈し、焼成は良好である。14世紀から15世紀代に位置づけられる。

12は体部中位で屈曲し外上方へひらく。口縁部外面に一段の横撫で調整を行う。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。14世紀から15世紀代に位置づけられる。

13から17は口縁部付近に一段の横撫で調整を施すタイプである。16、17以外は内面に煤、タールが付着する。17は体部中位に横撫で調整を行う。これらは15世紀代に位置づけられる。

18、19は口縁部付近に横撫でを行い、端部外面を面取りをする。内面全体と口縁部付近にかけ、煤が付着する。これらは比較的厚手のものである。15~16世紀代に位置づけられる。

20は口径9.2cmを測る。内湾気味に立ち上がる器形で、内面には撫で調整痕が明瞭である。



第13図 土師器皿

15世紀代に位置づけられる。

21、22はほぼ同形態である。21は口径11.4cm、器高2.1cm、底径5.2cm、22は口径12.6cmを測る。ともに口縁部付近に強い横撫で調整を行う。21は外面中位に指頭圧痕が見られる。15世紀代に位置づけられる。

23は底径3.4cmを測る。見込に直径1.3cmの小孔が認められる。内外面に煤・タールが付着する。15世紀代であろうか。

24は口径9.2cm、器高2.4cm、底径5.3cmを測る。体部は直線的に開き、端部を尖らせる。口縁部に横撫で調整を行う。15世紀代に位置づけられる。

25は口径14.6cmを測る。口縁部付近に横撫で調整を行う。さらに端部内面に横撫でを施す。15世紀代に位置づけられる。

26は口径10.2cmを測る。口縁部を斜上方に外折させ、端部を小さく摘まみ上げる。端部下の指頭圧痕が明瞭である。口縁端部付近に煤が付着する。

27は口径12.0cmを測る。口縁部付近に横撫で調整を行い、端部を面取りする。断面に漆が付着していることに注目したい。16世紀代に位置づけられる。

28は口径11.0cmを測る。口縁部に横撫で調整を行い、斜上方に外折させる。16世紀代に位置づけられる。

29は口径13.4cmを測る。口縁部付近に横撫で調整を行う。16世紀代に位置づけられる。

② 珠 洲（第14～16図）

大半の遺物が包含層からの出土である。僅かに近現代の用水跡からの出土があった。遺物の年代観は吉岡康暢氏の編年に依拠した。所産時期は13世紀後半から15世紀まで確認出来た。

壺・甕（1～14）

1は壺で口径10.0cmを測る。頸部をほぼ直立させ、口縁端部にいたり、嘴状に挽き出している。頸部中位に微隆起を持つ。内外面に撫で調整を行う。

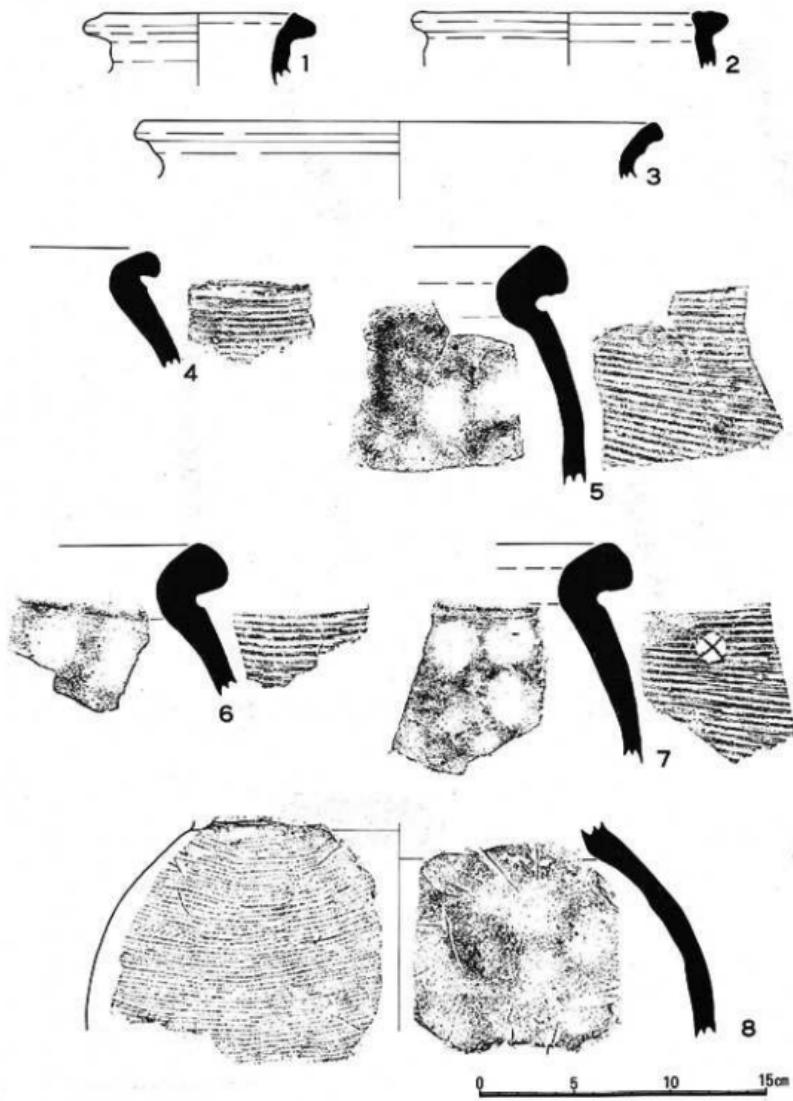
2は壺で口径13.4cmを測る。頸部を直立させ口縁端部を嘴状に挽き出す。頸部中位に微隆起を持つ。内外面に撫で調整を行う。

3は壺で口径27.0cmを測る。頸部から口縁部にかけて外方に聞く形態である。頸部中位に微隆起を持つ。内外面に撫で調整を行う。所産時期は13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

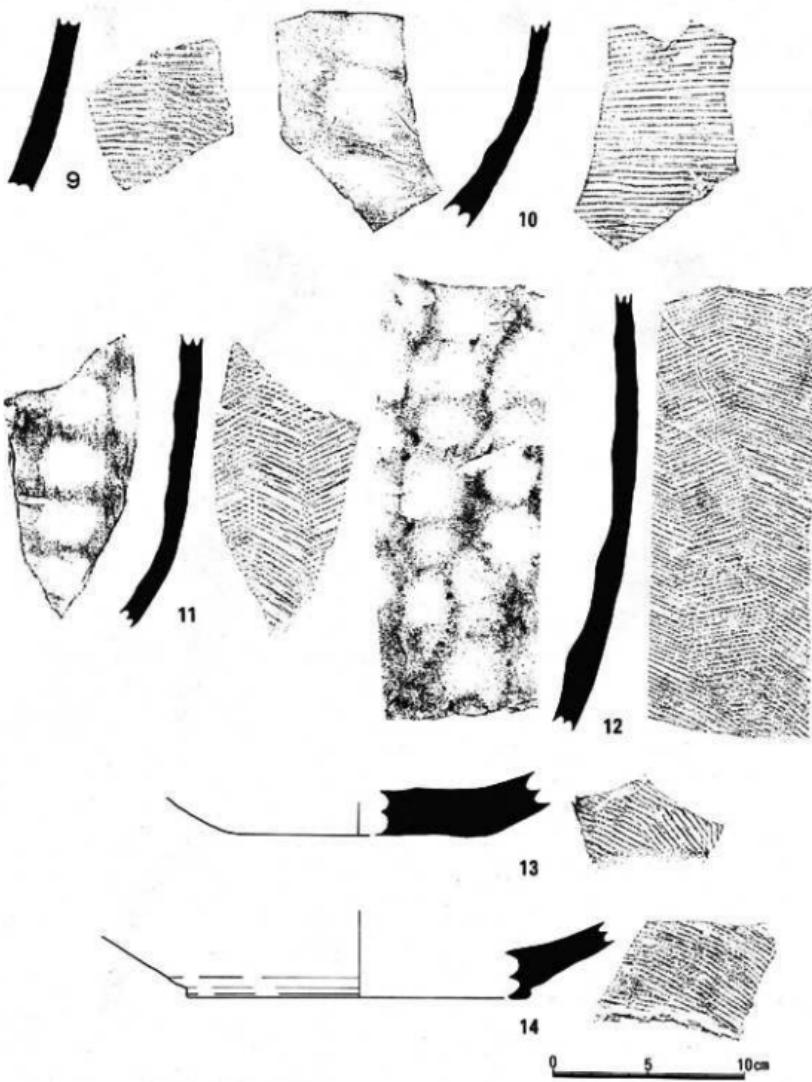
4は甕である。端部を外側に折り曲げ、口縁部と頸部の間を板状工具で調整した痕がある。断面には漆が付着している。用水跡から出土しており、かなり摩滅している。所産時期は13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

5～7は甕である。口縁部はくの字状に屈折し、端部は方頭を呈する。6は肩部にA印の刻印が押されている。所産時期は14世紀代に位置づけられる。

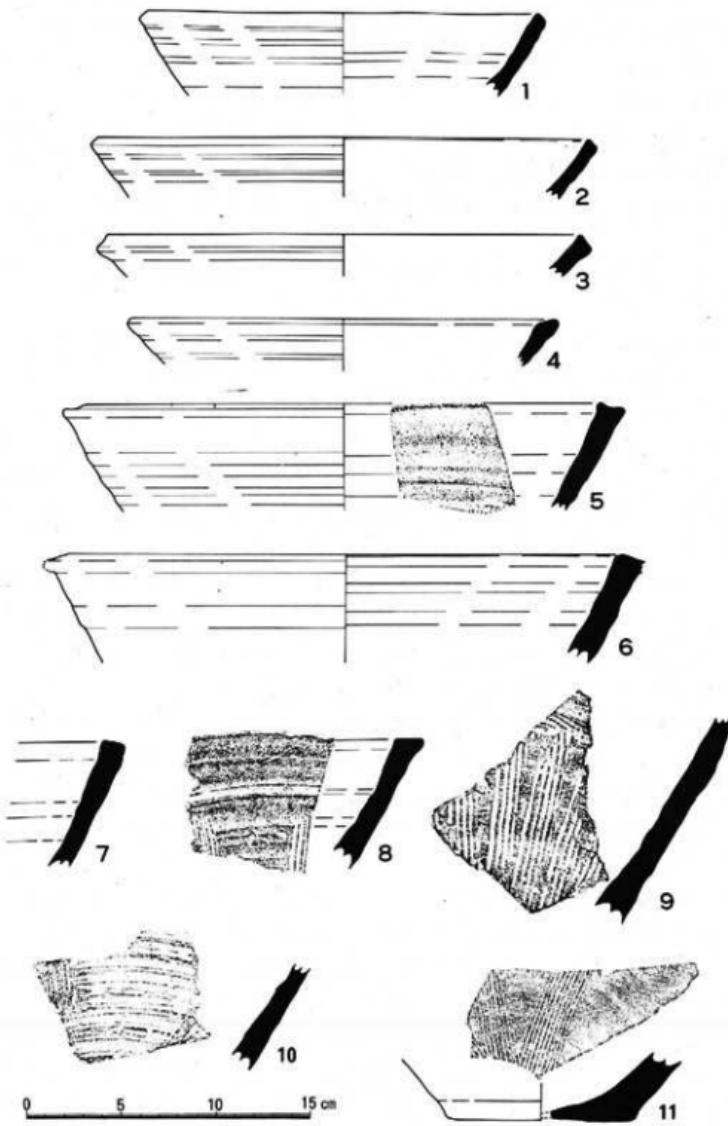
8は甕の頸部から体部である。頸部径は11.0cmを測る。叩き目の幅は非常に細かく1cmあたり6条を数える。



第14図 珠 洲(%) 1~3 壺、4~8 壺



第15図 珠洲壹甕(少)



第16図 珠洲擗鉢(%)

9から12は壺もしくは壺の体部破片である。11、12は叩き目が綾杉状に施される。10は他に比べて具痕がやや大きい。さらに当て具痕の上から丁寧な横撫で調整を行う。

13、14は壺もしくは壺の底部破片である。共に叩き目が底部まで及んでいるものである。

擂 鉢（1～11）

1は口径20.6cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は方頭を呈する。内外面ともに撫で調整を行う。珠洲Ⅲ期に属し13世紀後半に位置づけられる。

2は口径26.0cmを測る。1と同様の器形であり、珠洲Ⅲ期に属し13世紀後半に位置づけられる。

3は口径25.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は方頭を呈する。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

4は口径22.4cmを測る。口縁端部は内傾し、面取りを行う。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

5は口径27.4cmを測る。体部は直線的で、口縁端部上面を強く撫でる。内外面に撫で調整を行う。内面の鉗目は7条を数える。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

6は口径29.0cmを測る。体部は直線的で、口縁端部は方頭を呈する。端部上面は面取りを行い、やや外側に引き出す。内外面ともに撫で調整を行うが、作りはやや粗雑である。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

7は直線的で口縁部は外方にのび、端部は方頭を呈する。端部上面は面取りを行う。内外面ともに撫で調整を施している。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

8はやや内湾しながら外方に立ち上がる。口縁端部は水平で外側に引き出す。内外面ともに撫で調整を行う。珠洲Ⅳ期に属し13世紀末から14世紀代に位置づけられる。

9は体部は直線的で外方にのびる器形である。口縁部内側、鉗目の直上に波状文を施す。鉗目は1.3cmの幅で4条を数える。珠洲Ⅳ期に属し、15世紀後半に位置づけられる。

10、11は体部片と底部である。10の内面はろくろ撫でが顕著である。11の鉗目は9条を数える。底部付近に指頭圧痕が2つ見られる。ともに現代の用水跡から見つかったためかなり、摩滅している。

③ 中国製磁器（第17図）

中国製磁器は青磁、青花の碗・皿が出土したが、全て包含層からである。遺物の年代観として青磁は上田秀夫氏、青花は小野正敏氏の編年に依拠した。13世紀後半から16世紀前半まで確認出来た。

1は青花の皿で底径2.6cmを測る。いわゆる基督教底で、疊付は釉剥ぎしてある。外面下半は芭蕉葉文を、内面見込みには花文を描く。15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。

2から10は青磁の碗である。7は口径12.0cm、8は16.0cm、9は16.0cm、10は18.8cmを測る。2、9を除き鎌倉弁文碗である。8、10以外は鎌の単位が明確でない。9は内湾気味に外方に立ち上がり、口縁端部を外折させる器形である。3～8、10は13世紀後半から14世紀前半

に、2と9は14世紀後半から15世紀前半に位置づけられる。

(4) 近世（江戸時代）以降

① 肥前系陶磁器（第19図）

出土した肥前系陶磁器には碗、皿、擂鉢などが見られた。全て包含層からの出土である。遺物の年代観は大橋康二氏の編年に依拠した。所産時期は16世紀末から18世紀代まで確認出来た。

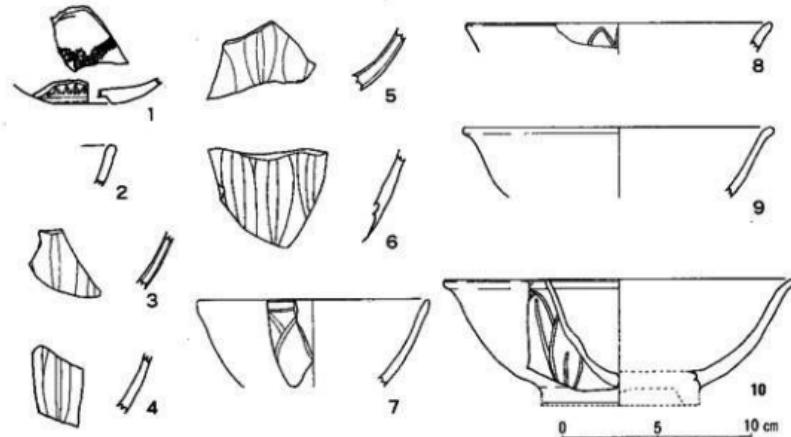
皿（1～9）

1は唐津で、高台径は3.0cmを測る。やや内湾しながら外方に立ち上がる器形である。削り出し高台を持ち、量付部分の幅は狭い。体部外面に撫で調整を行い、外面下半には胎土目積みが1個付着している。外面下半は無釉で、内面にはくすんだ灰釉を施す。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

2は唐津で、高台径は4.0cmを測る。やや直線的に立ち上がり、削り出し高台を持つ。体部外面は回転窓削り調整の後撫で調整を行っている。外面下半から中位にかけては1段の棱が見られる。内面全体から高台内まで灰釉を施すが、量付部分は拭い取られている。見込付近に胎土目積み痕が2つ見られる。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

3は唐津で、口径11.6cmを測る。口縁部は直線的に外方に伸びる。内面全体と口縁部付近にくすんだ灰釉を施す。胎土目積み期のものと考えられる。

4は唐津で、口径11.0cm、器高3.6cm、高台径5.0cmを測る。やや内湾しながら外方に立ち上がる器形で、口唇部を内側に屈曲させている。削り出し高台で、体部外面及び高台内は撫で調整を行っている。内面全体と体部外面中位まで胎色の灰釉を施す。見込付近に胎土目積み痕が1つ見られる。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。



第17図 青花・青磁（%） 1 青花皿、2～10 青磁碗

5は唐津で、高台径は4.0cmを測る。削り出し高台で体部外面下半に撫で調整を行う。内面全体と高台部付近まで灰釉を施す。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

6, 7は伊万里で、それぞれ口径12.5cm、11.0cmを測る。ゆるく内湾しながら上外方に開く器形である。内面は二重格子文で外面は無釉である。僅かに残った見込み付近には蛇の目釉剥ぎを行っているのがわかる。長崎県波佐見町付近で製作されたものであろう。18世紀代に位置づけられる。

8は佐賀県嬉野町で焼成された嬉野焼の皿である。高台径は4.5cmを測る。やや内湾しながら立ち上がる器形で、削り出し高台を持つ。体部外面下半に回転範削り調整を行った後に撫で調整を行う。外面には灰釉を、内面には銅緑釉を施したあと蛇の目釉剥ぎを行っている。18世紀代に位置づけられる。

9は伊万里で、現代の用水跡より出土した。高台径は7.0cmを測る。内底面中央にはコンニャク印判による五弁花を、高台内は渦福字を施す。波佐見町付近で焼成されたものであろう。18世紀後半に位置づけられる。

擂 鉢 (10, 11)

10は肥前系陶器で、口径は24.0cmを測る。口縁端部を折り返し、撫で調整を行う。このため外面には小突帯が巡る。内面の鉗目は密で、上端を撫で消している。内外面に鉄釉を施す。

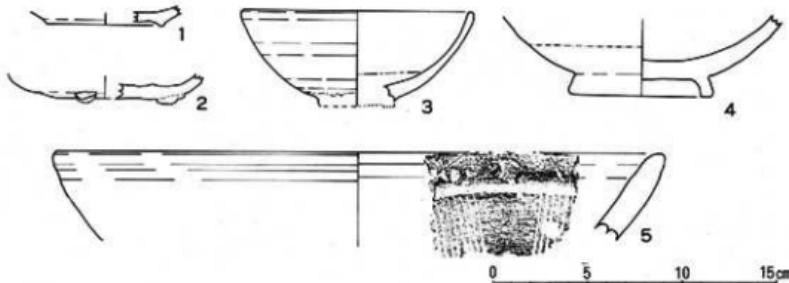
11は肥前系陶器で、口径は28.0cmを測る。口縁部を外側に折り曲げ、横撫で調整を行い、方頭に仕上げる。内面の鉗目は密で、上端を撫で消している。内外面に鉄釉を施す。

これらの擂鉢は造構に伴うものではないため、所産時期などは言及できない。ただ、本遺跡と同じく、1996年に調査を行った出遺跡においても同形態の擂鉢が出土しており、この手の擂鉢が広く流通していたものと考えられる。

② 越 中瀬戸 (第20図)

大半が包含層からの出土であるが、一部近現代の用水跡からの出土が見られた。遺物の年代については宮田進一氏の編年観に依った。所産時期は17世紀から18世紀代まで確認出来た。

皿 (1 ~ 7)



第18図 瀬戸・越前・その他の陶器 (1)

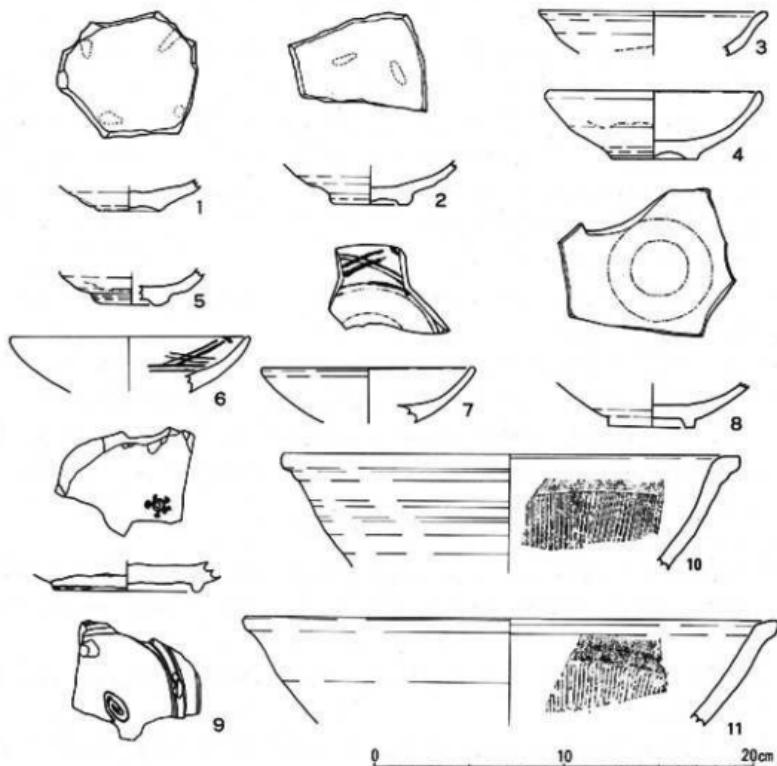
1 瀬戸美濃皿、2 瀬戸美濃香炉、3 灰釉碗、4 碗、5 越前擂鉢

1は内禿げ皿の底部片である。底部は欠損しているが削り出し高台であろう。見込付近から高台内まで灰釉を施す。内底面中央に印花文を施す。17世紀前半に位置づけられる。

2は内禿げの丸皿である。口径は10.6cm、器高2.7cm、高台径2.3cmを測る。やや内湾気味に外方に立ち上がる器形で、削り出し高台を持つ。内外面には撫で調整を行う。見込付近から体部下面半に灰釉を施すが、二次比熱を受ける。露胎部分は赤褐色を呈する。17世紀前半に位置づけられる。

3は内禿げの丸皿である。口径は10.0cm、器高2.0cm、高台径4.5cmを測る。直線的に外方に立ち上がる器形である。外面は範削り調整のあとに撫で調整を行う。底部は付高台である。内底面には軸止めの段を設ける。見込付近から体部中位まで灰釉を施す。2と同様二次比熱を受ける。内底面には一部磨り減っているが、一六弁の印花を施す。17世紀前半に位置づけられる。

4は丸皿で、口径12.0cmを測る。内湾気味に外方に伸びる。内外面には灰釉を施す。17世



第19図 肥前系陶磁器 (1/2)

1~5 唐津皿、6.7.9 伊万里皿、8 琵琶皿、10.11. 肥前系描鉢

紀後半に位置づけられる。

5は内堀の丸皿である。削り出し高台で、高台径は3.6cmを測る。内堀気味に外方に立ち上がる器形である。体部外面下半は範削りのあと撫で調整を行う。見込付近から体部外面中位に灰釉を施す。17世紀後半に位置づけられる。

6は口径10.0cm、器高3.0cm、高台径4.0cmを測る。削り出し高台で、体部は内堀気味に外方へ立ち上がる器形である。体部外面下半を範削りした後に撫で調整を行う。内面全体と体部外面中位まで鉄軸を施し、見込付近に蛇の目釉剥ぎをする。17世紀後半から18世紀代に位置づけられる。

7は高台径5.4cmを測る底部片である。体部は高台からほぼ水平に伸びている。内面全体と体部に僅か鉄軸を施し、見込付近に蛇の目釉剥ぎを行う。17世紀後半から18世紀代に位置づけられる。

碗（8～11）

8、9は丸碗である。8は口径8.5cm、9は9.4cmを測る。体部は内湾し、口縁部を直立させる器形である。内外面に撫で調整及び鉄軸を施す。

10、11は碗の底部である。10は高台径4.5cm、11は3.8cmを測る。削り出し輪高台で、体部外面下半は範削りを行った後に撫で調整を行う。内面全体から高台付近まで鉄軸を施す。

これらの碗は1996年度に行った出遺跡の発掘調査においても形態の似たものが出土している。時期的には18世紀以降の所産であろう。

擂 鉢（12～15）

12は口縁端部を折り返し、縁帯を形成する。幅は短く、内外面に撫で調整と鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

13は口径27.0cmを測る。口縁端部を折り返し、縁帯を形成する。下縁を横へ挽き出している。縁帯幅は1.5cmを測る。内外面に撫で調整と鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

14は口径19.0cmを測る。口縁端部を折り返し、縁帯を形成する。下縁は斜め下方へ垂下する。縁帯幅は1.4cmを測る。内外面に撫で調整と鉄軸を施す。17世紀前半に位置づけられる。

15は底径11.0cmを測る。単位は確認出来ない。

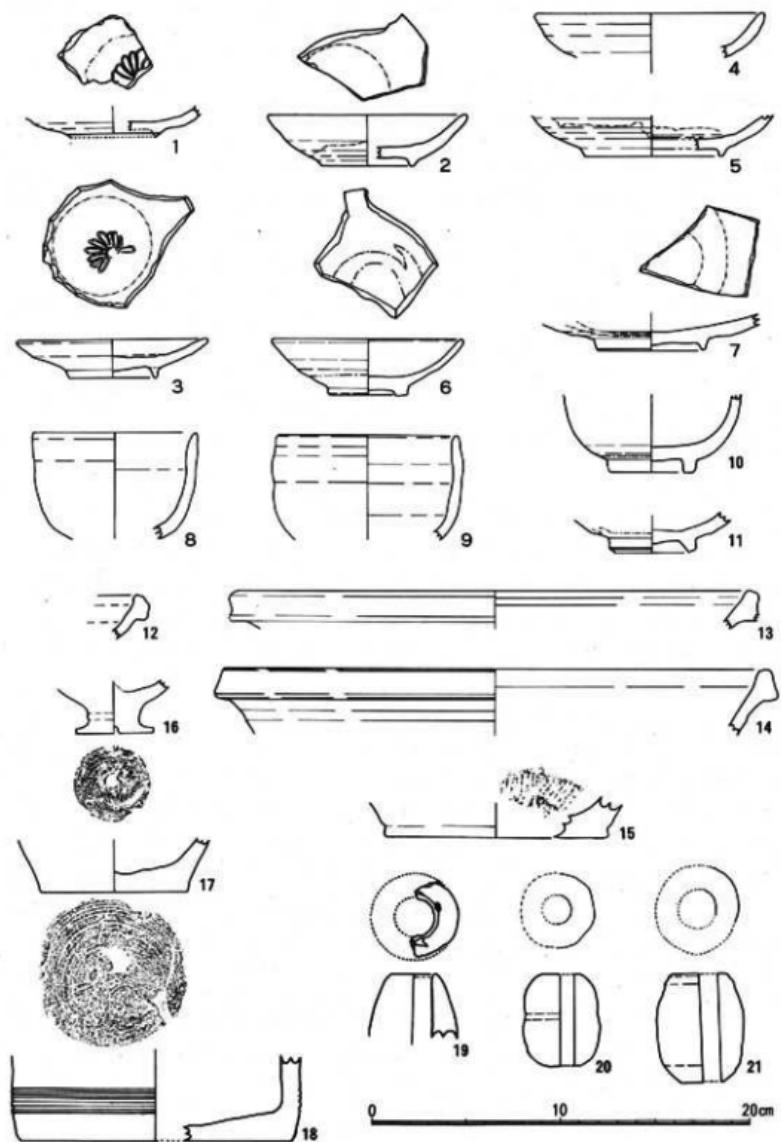
その他（16～21）

16は灯明具である秉燭である。底径4.0cmを測る。内面に僅かに鉄軸を施し、脚部は無釉である。底部外面には糸切り痕未調整で、中央に直径5mmの穿孔が見られる。燈心立ては欠損している。

17は壺の底部であろうか。底径は7.8cmを測る。内底面には轆轤撫で痕が顕著である。内外面に鉄軸を施す。

18は匣鉢の底部である。底径は14.2cmを測る。底部外面には静止糸切り痕が見られる。内外面に撫で調整と鉄軸を施す。体部下半には5条の沈線を描く。

19から21は陶錠である。外径と高さは、19は約2.5cm、20は約3.0cmと約5.7cm、21は約2.3cm



第20図 越中瀬戸(%)

1~7 盤、8~11 碗、12~15 擂鉢、16 乗鍋、17 蓋?、18 匣鉢、19~21 陶器

と約4.6cmを測る。19は無軸、20、21は鉄軸を施す。21は天目茶碗によく見られるような光沢のある鉄軸である。

(5) その他の陶器（第18図）

これまで紹介してきた以外の陶器について一括して報告する。瀬戸美濃や越前、產地不明の陶器が出土したが、大半は包含層のものであり、1部用水跡からのものである。

1は瀬戸美濃の皿である。削り出し高台で、高台径は6.0cmを測る。大窓期の製品で、16世紀前半に位置づけられる。

2は瀬戸美濃の香炉で、底径は5.0cmを測る。体部は底部から直立する器形である。内外面に撫で調整を行う。内面見込み付近に僅かに鉄軸が見られる。底部外面には糸切り痕が明瞭である。古瀬戸後期製品であり、15世紀後半に位置づけられる。

3は灰釉の碗で、口径12.0cmを測る。内湾しながら外方に立ち上がる器形である。内外面に撫で調整を行った後に灰釉を施す。内面見込みは蛇の目釉剥ぎを行っており、17世紀後半から18世紀代の所産であろう。產地は不明であるが、1996年度に行った出遺跡の調査においても同様の碗が出土している。

4は碗で、高台径7.2cmを測る。体部から内湾気味に立ち上がる器形である。体部下半には回転窓削り調整を施す。断面台形の高台をつけた後に窓削り調整を行う。内外面に黄白色の釉を掛けける。内面見込み付近には重ね焼きのためのハリ痕が認められる。產地、時期ともに不明である。

5は越前の擂鉢で、口径32.0cmを測る。口縁端面は内傾して面取りを行う。内外面は撫で調整を行う。色調は赤褐色を呈し、胎土中に白粒を含む。16世紀代に位置づけられる。

B. 石 器

① 打製石斧（第21、22図）

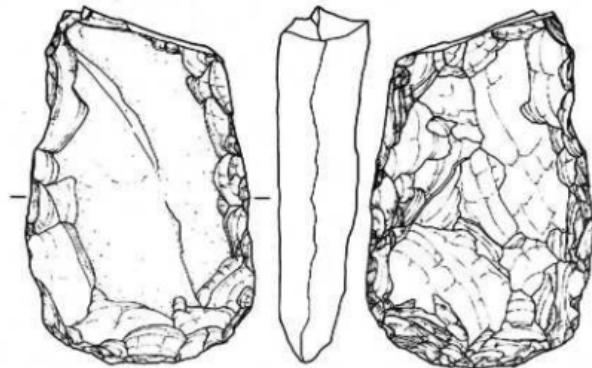
打製石斧は6点出土しており、刃部の小破片1点を除き図示した。石材はいずれも凝灰岩系で、1～3、5は凝灰岩のなかでも良質の類似した石材を用いている。1～3は比較的扁平で幅広の打製石斧で、縄文時代でも後出的である。4、5は短冊形に近く、中期以降各期に認められる形態である。打製石斧の使用痕はほとんど観察できないが、4、5は破損品であり、遺跡内または遺跡付近で使用されたものであろう。

② 磨製石斧（第23図6、7）

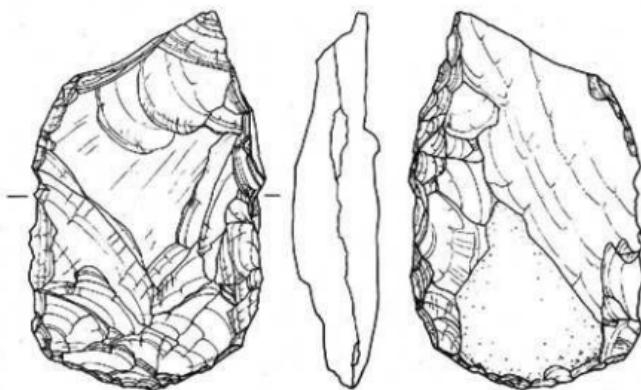
6は蛇紋岩の磨製石斧で、頭部が欠損している。刃部は使用により著しく破損しており、使用にたえない。縄文時代の磨製石斧の刃部破損の典型的な例で、激しい使用の方法を示している。7は凝灰岩系の石材を用いたもので、全体を丁寧に研磨している。頭部は欠損しているが、刃部には使用による刃こぼれがほとんど認められない。

③ 石 鍤（第23図8）

1点のみの出土である。扁平な楕円錐の上下両端を打ち欠いただけの砾石鍤である。石鍤



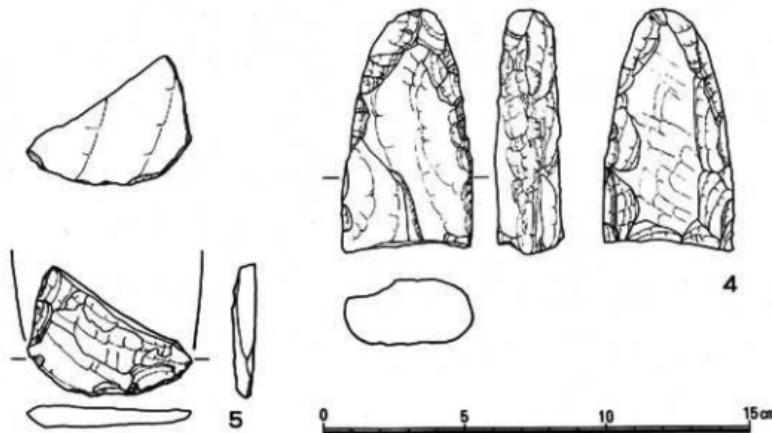
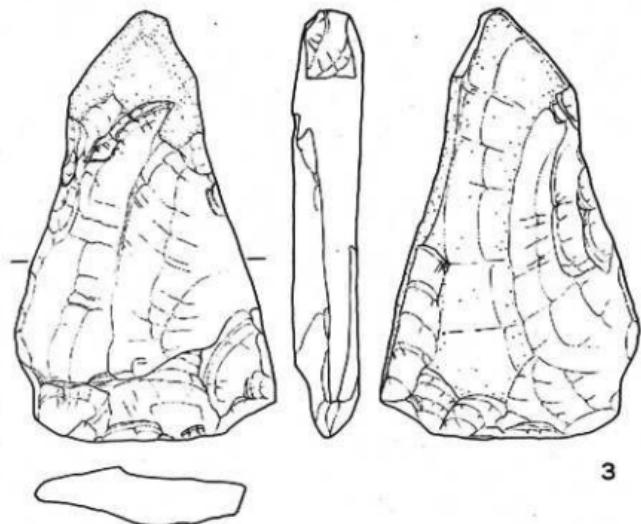
1



2



第21図 石 器(1)



第22図 石 器(2)

の仲間としては比較的大型である。

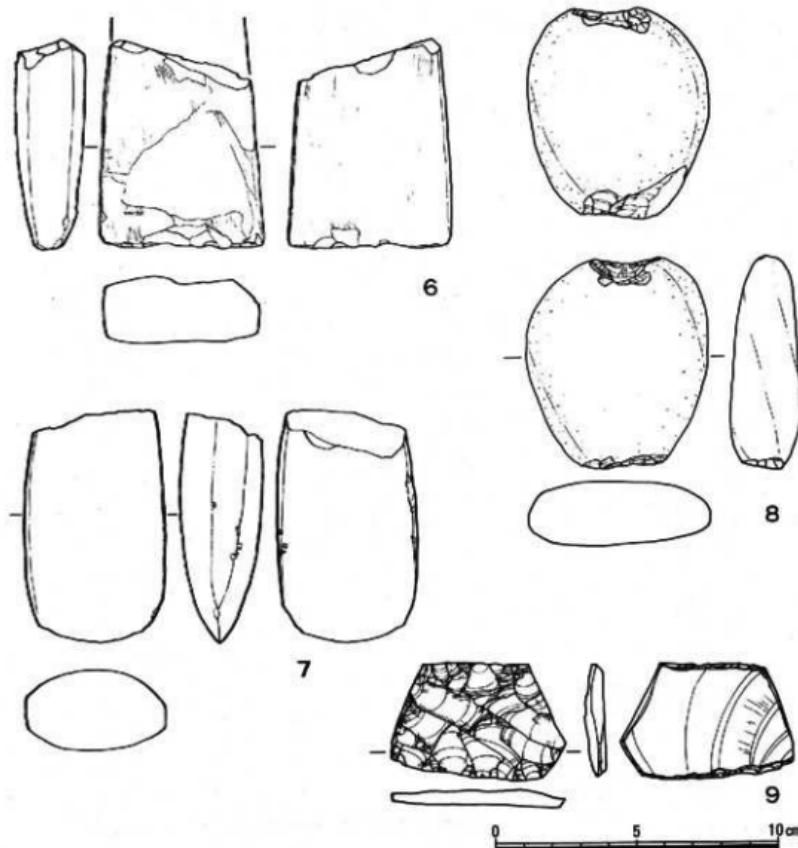
④ 削 器 (第23図 9)

頁岩製の削器で、薄い剥片の片面を丁寧に剥離を施し、さらに薄く仕上げたものである。富山県内の縄文遺跡では類例をみない。

C. 金 属 製 品 (第24図)

出土した金属製品は僅かで、釘が5点、鎌が3点あるのみであった。全て包含層からの出土である。図化したのはその中でも残りの良かった3点の釘である。

1は下部が折れ曲がっているが、長さ約11cm、太さは約5mmを測る。角釘である。



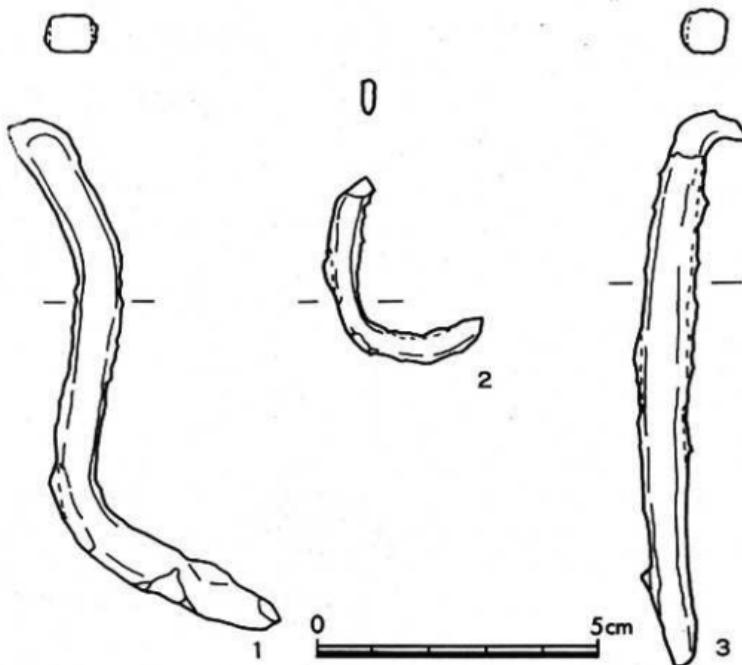
第23図 石 器(3)

2はやはり下部が折れ曲がっている角釘である。高さ4.3cm、太さ5mm×2mmを測る。

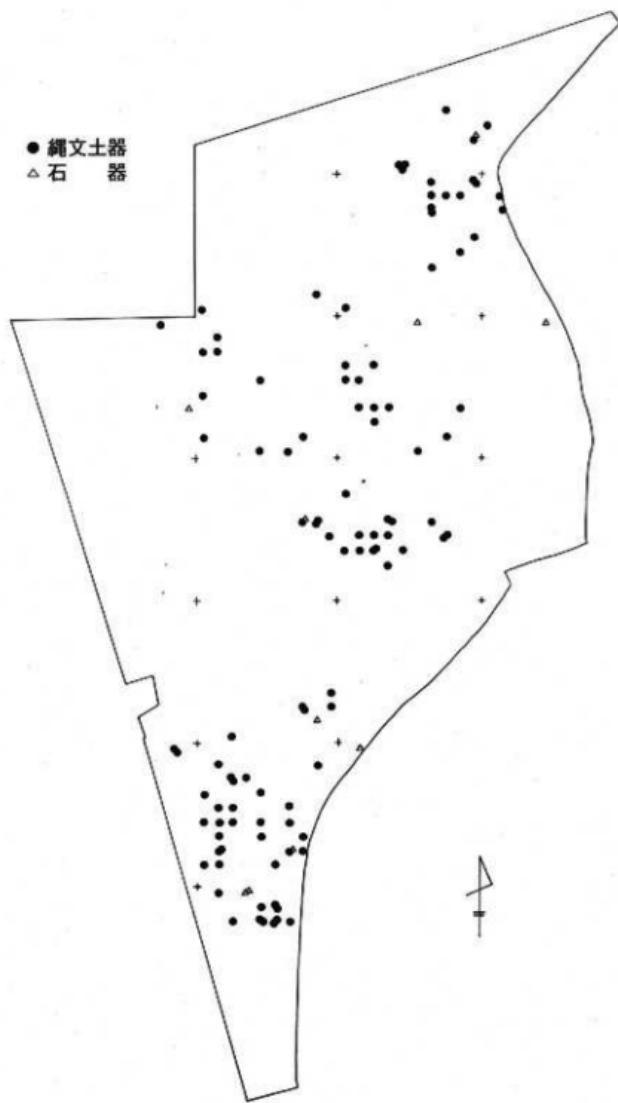
3は高さ9.8cm、太さ約6mmを測る、角釘である。

D. 出土遺物のまとめ

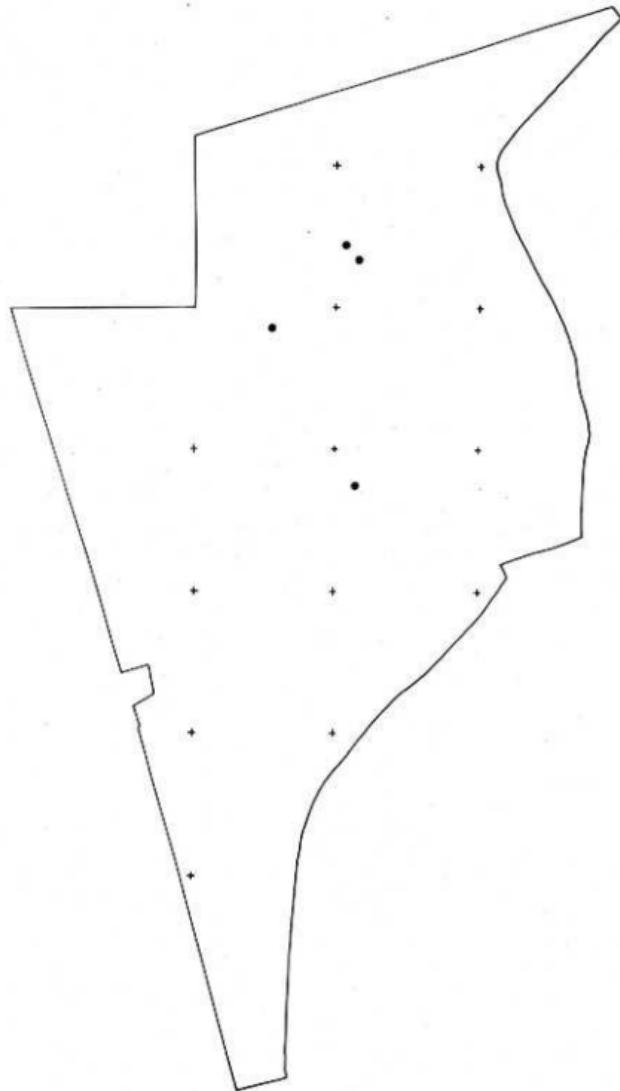
出土した遺物は縄文時代中期から近現代にわたり、多数の土器、陶磁器、石・鉄製品などであった。量的にさほど多くなく、コンテナ20箱弱であった。大半が包含層からの出土であり、遺構に伴うものは唯一、近現代の溝（用水跡）という状態であった。遺物は縄文時代（中期～晩期）、古代（平安時代）、中世（鎌倉・室町時代）、江戸時代後半（17,18世紀代）、近代以降のものが見られる。それぞれの遺物の出土分布を示したのが、第25～31図である。これを見ると、どの時期の遺物も、調査区北～北東部、中央部、南部に偏りが認められる。ただ、調査区中央部には溝（用水跡）があり分布の傾向は述べられない。遺構配置図からは、北東部及び南部には柱穴状ピット群や土坑が検出されており、遺物の分布とほぼ対応するが時期的な偏りが無く、遺構の時期は比定出来ない。



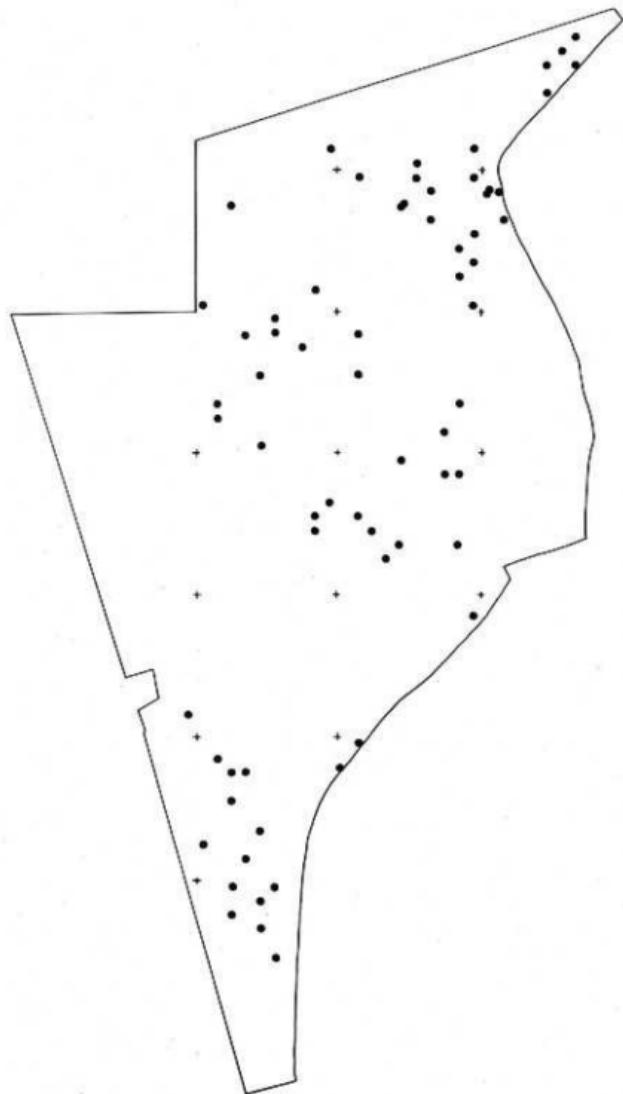
第24図 鉄 製 品



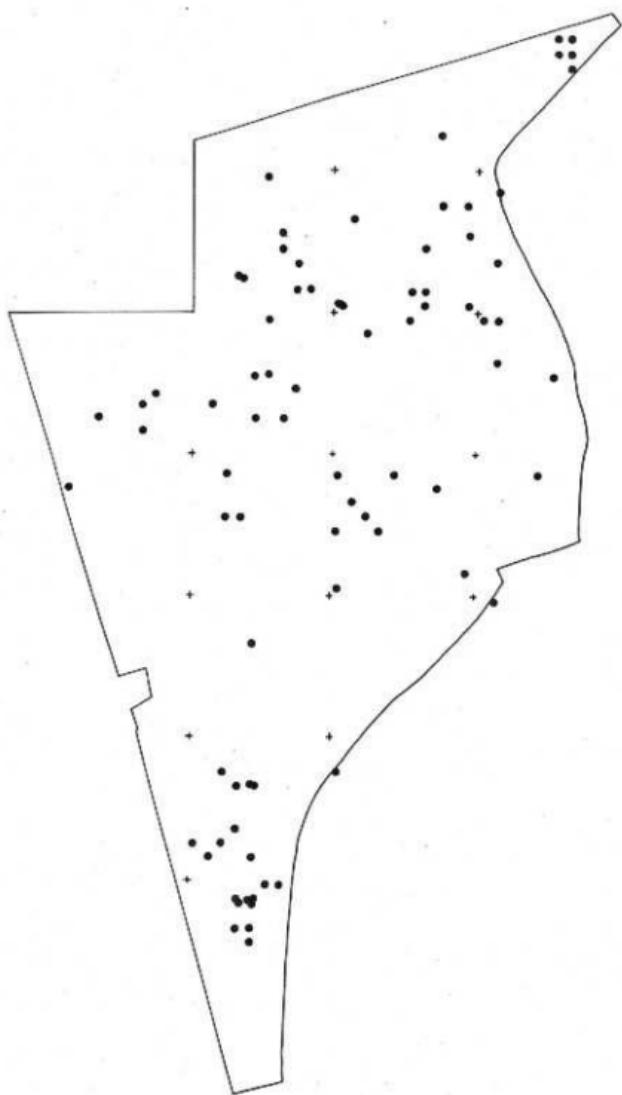
第25図 縄文土器・石器の分布 (1/200)



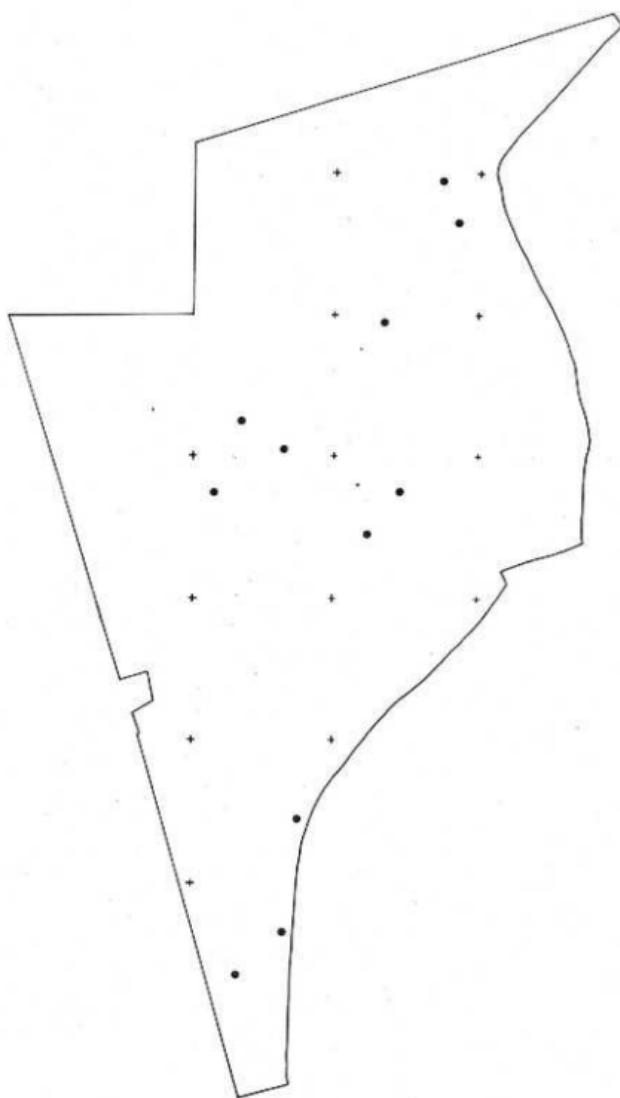
第26図 須恵器の分布 (1/200)



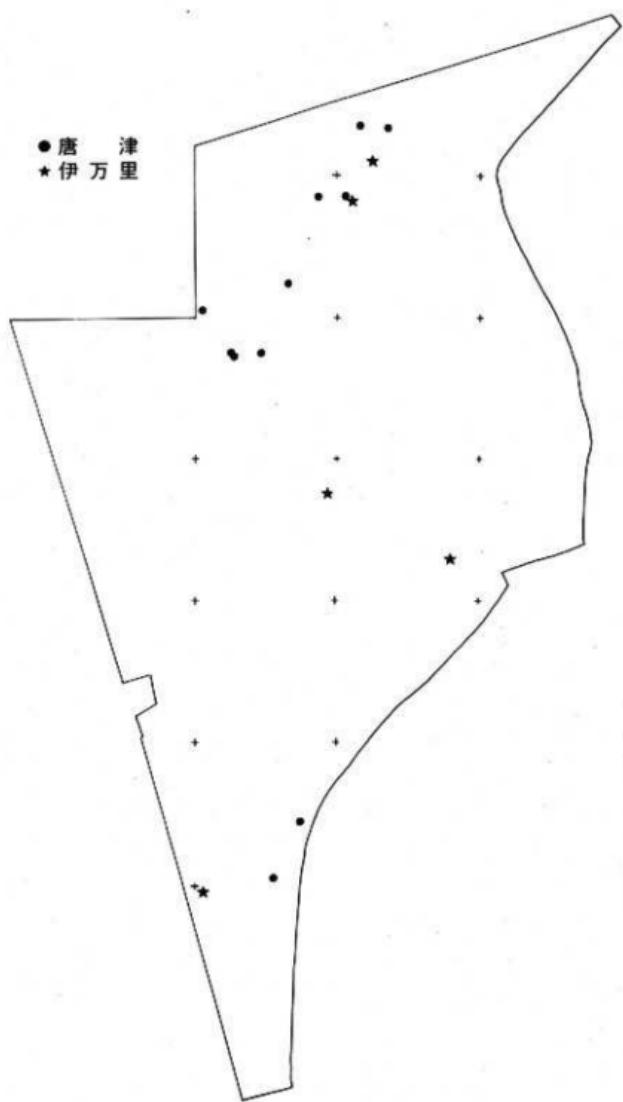
第27図 土師器の分布 (1/200)



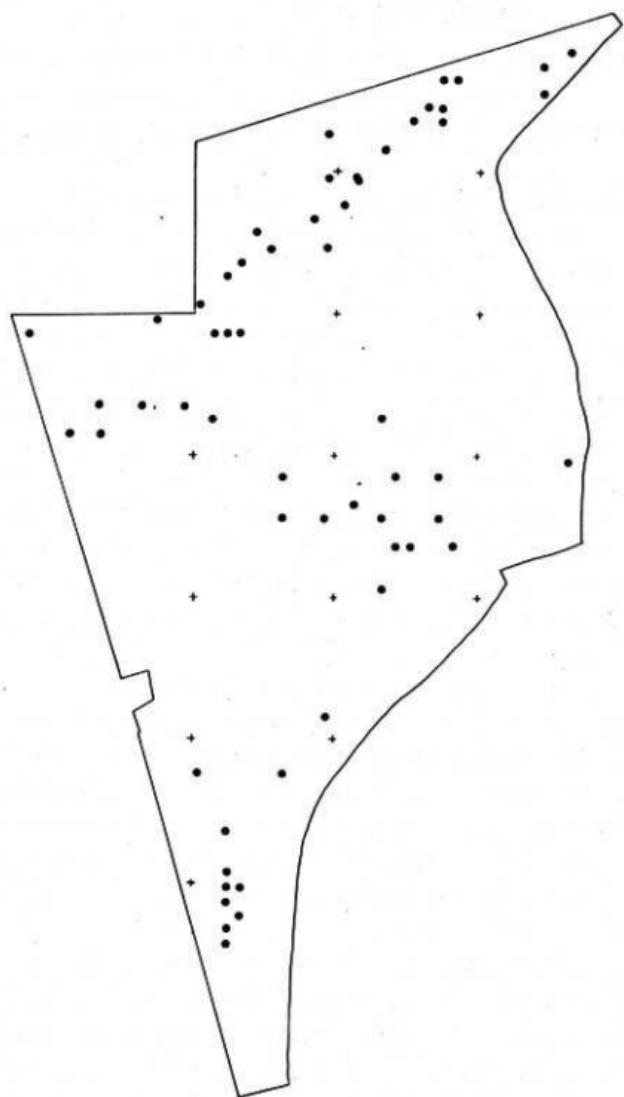
第28図 珠洲の分布 (1/200)



第29図 青磁の分布 (1/200)



第30図 唐津・伊万里の分布 (1/200)



第31図 越中瀬戸の分布 (1/200)

7. 調査のまとめ

山下Ⅱ遺跡の発掘調査では以上のように、縄文時代中期以降江戸時代まで断続的に遺物の出土が確認できた。しかし遺物の量は発掘面積に比べて少なく、また明確な遺構も存在していない。こうした遺跡は遺跡地図では一般に散布地として処理されているが、その性格や、評価についてはほとんど語られないことが多い。

時代別に検討を行えば、まず、縄文時代については、近年竪穴住居だけでなく、平地住居も注目されており、特に北陸地方では新潟県に数多く知られている。中期から晩期の方形の柱穴列に見られる平地住居だけでなく、柏崎市尾根坂遺跡のように前期の不正円形の柱穴列も存在することから、平地住居は多様な形態が存在することが予想される。富山県内では井口村の井口遺跡の住居跡も既に指摘したように平地住居の可能性がある。残念ながら山下Ⅱ遺跡では複数の時代が重複しているため、縄文時代の1時期とは限定できないが、柱穴群が存在しており、軽易な建物が構築されていた可能性があろう。なお、生産用具としては、打製石斧が卓越しており、この遺跡周辺が、打製石斧を使用する生産活動の季節的な根据地であった場所とする推定も成立しうる。具体的には根茎類等採取のための秋期の出作り小屋的な存在が推定できる。

平安時代では、須恵器、土師器が僅か3点のみの出土で、発掘地点が何らかの遺跡というよりは、付近に該期の遺跡遺構の存在が想定できる。山下Ⅱ遺跡の北側には、平安時代のこの地域の中核的集落である佐伯遺跡が存在しており、佐伯遺跡の関連遺構等の広がりが山下Ⅱ遺跡内にもおよんでいることも考えられよう。さらに近年注目されている古代北陸道の関係も考慮すべきである。

中世では青磁、珠洲や土師器の型式から13世紀から16世紀までの時間幅が確認された。出土遺物が多いとはいえないが、器種の組成に偏りがないことなどから一般的な集落遺跡と大きな差異は認められず、鎌倉・室町期に小規模ながら村落が存在したと考えられる。遺構でこうした点が確認できないのは、発掘地点がこの段階の遺跡の中心をはずれていること、圃場整備による地山面の削平で遺構が消滅したこと、明確な遺構が残らないような構造をもつ施設の存在などが考えられるが、現段階では遺跡の中心が他の場所に存在する可能性が高い。平成11年度以降に発掘が予定されている山下Ⅱ遺跡の南隣の吉野遺跡などは、上中島台地では大規模な集落の可能性があり、発掘地点はその周縁部とも考えられる。

近世ではほぼ江戸時代全般の遺物が出土しているが、この時期の住居等の遺構の検出の困難さから判断すれば、遺構が確認できないことに何の不思議もない。しかし、佐伯村が江戸時代において、常に佐伯家一戸の村落で、佐伯家が当時から勤いていない事実があり、発掘地点での遺物の出土はこうした史実に照らせば、集落の存在以外の、何らかの遺物が残される原因を考えなければならない。むしろ南側に隣接する近世に存在していた吉野村との関係を考えるべきかもしれない。

図版



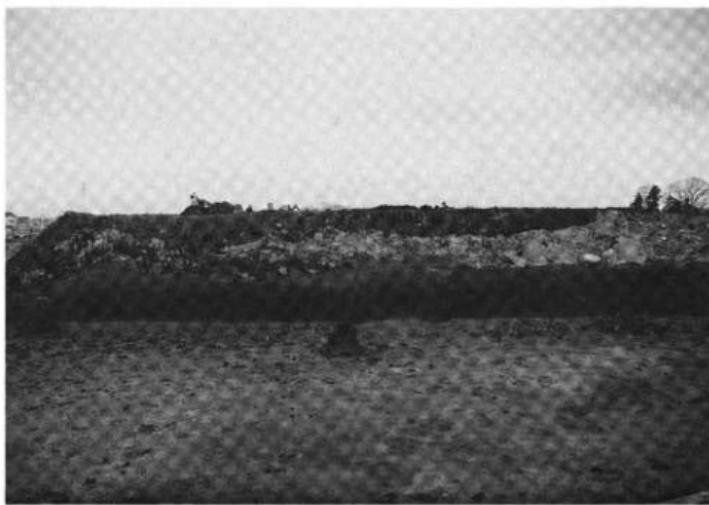
表土剥ぎ取り状況 南から



表土剥ぎ取り状況



土層堆積狀況



土層堆積狀況



発掘調査状況



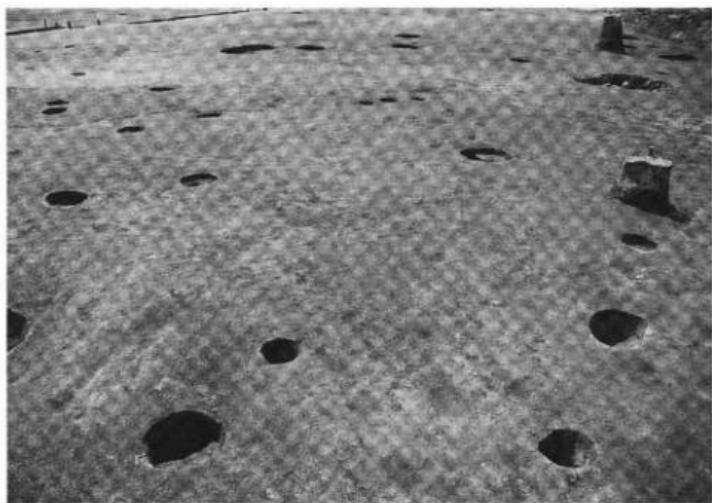
発掘調査状況



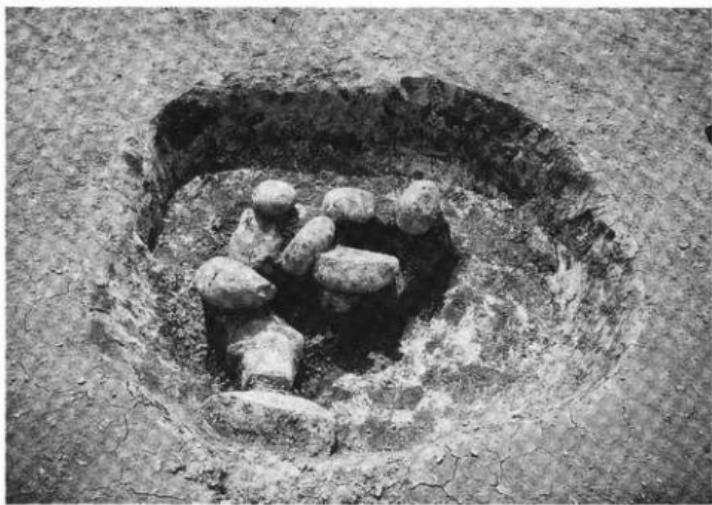
発掘調査状況



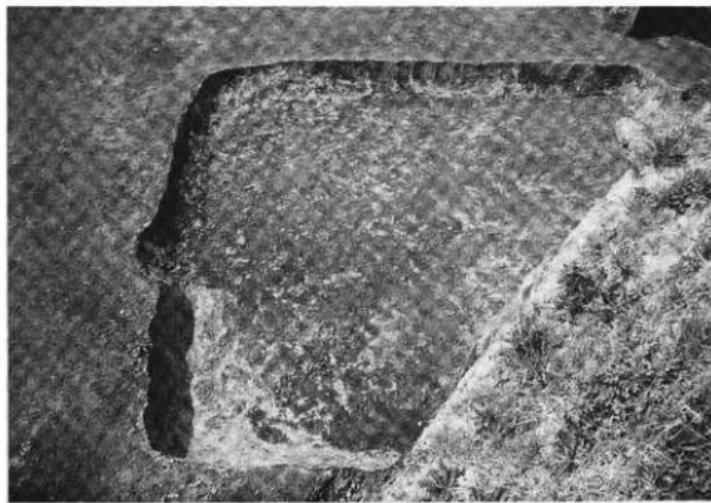
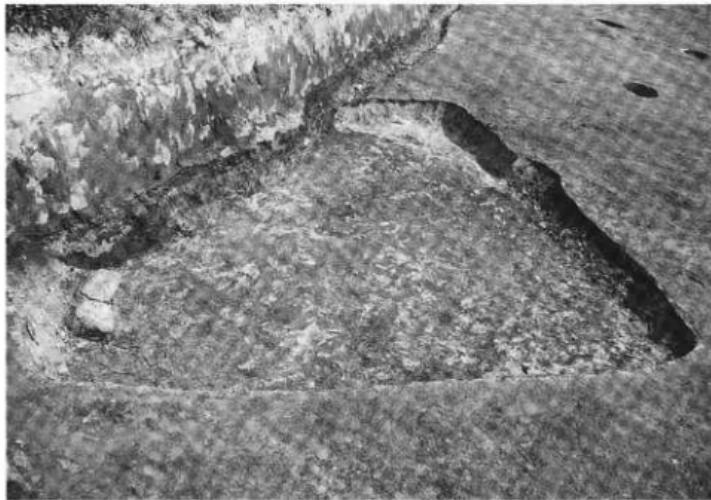
柱穴状ピット群



柱穴状ピット群



土 坑 SK01



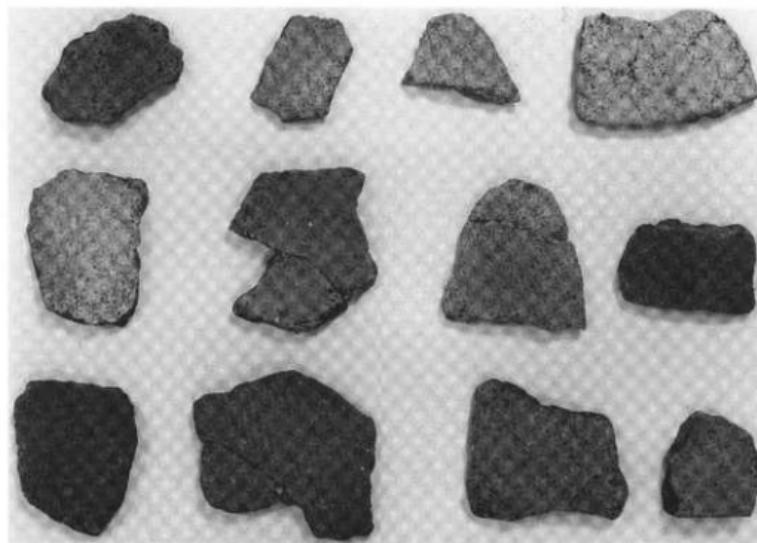
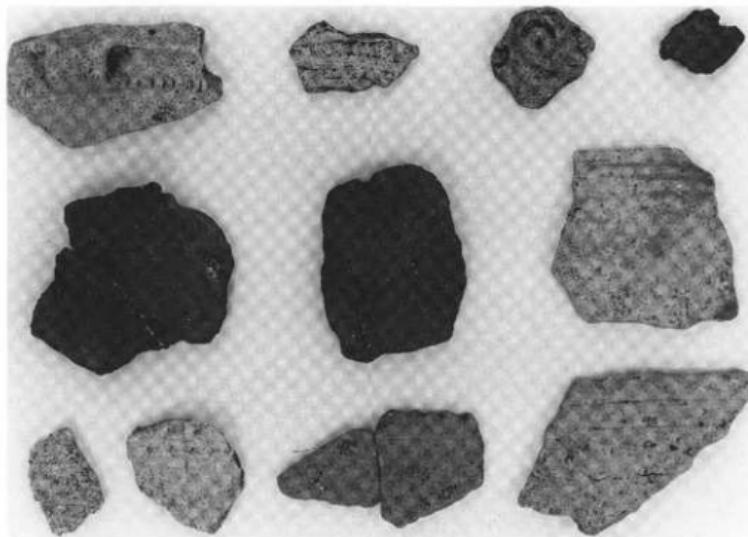
方形竖穴状土坑



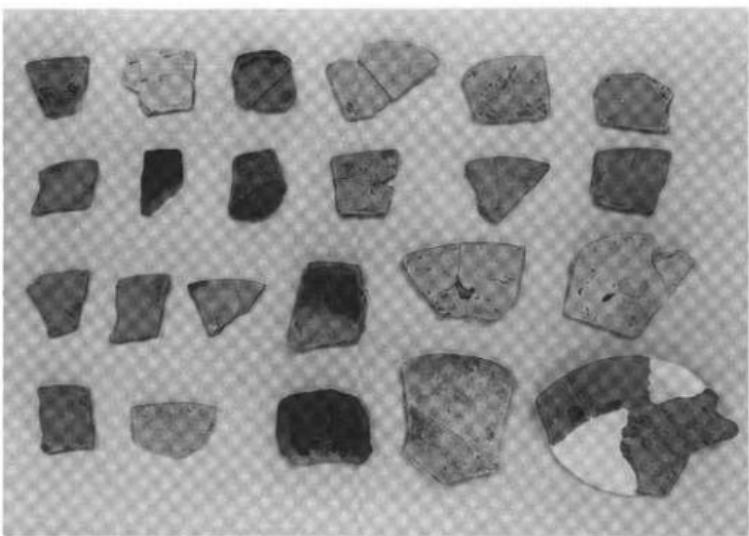
溝（用水跡）



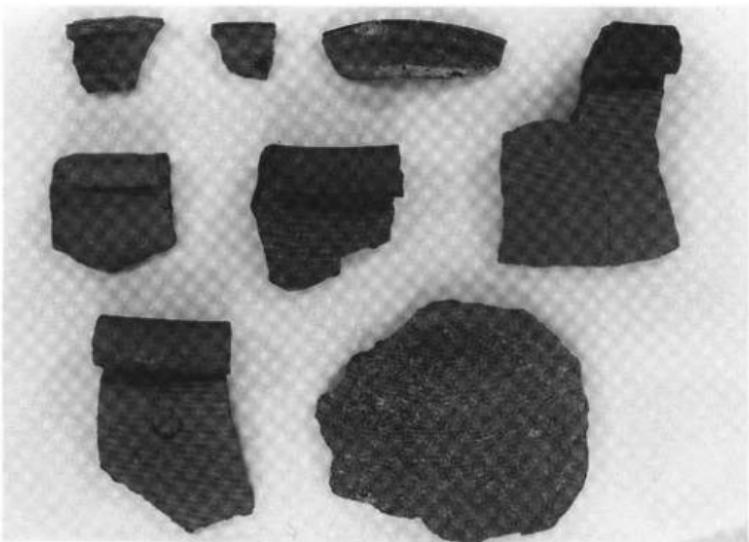
溝（用水跡）



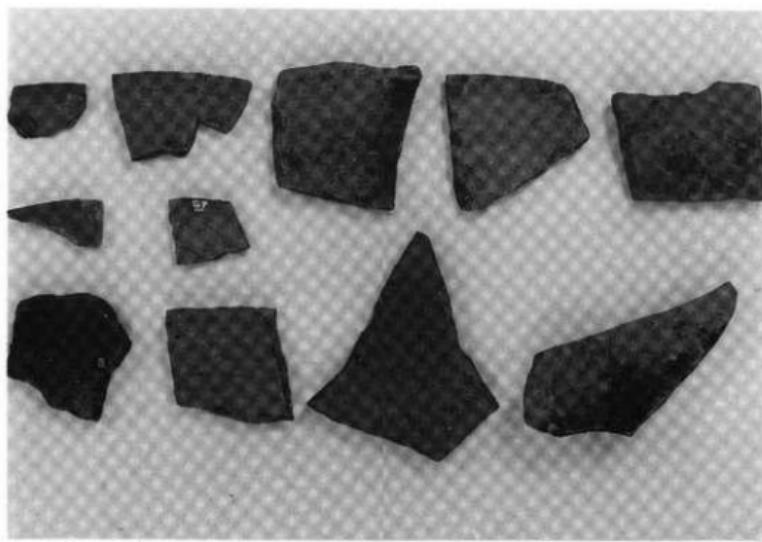
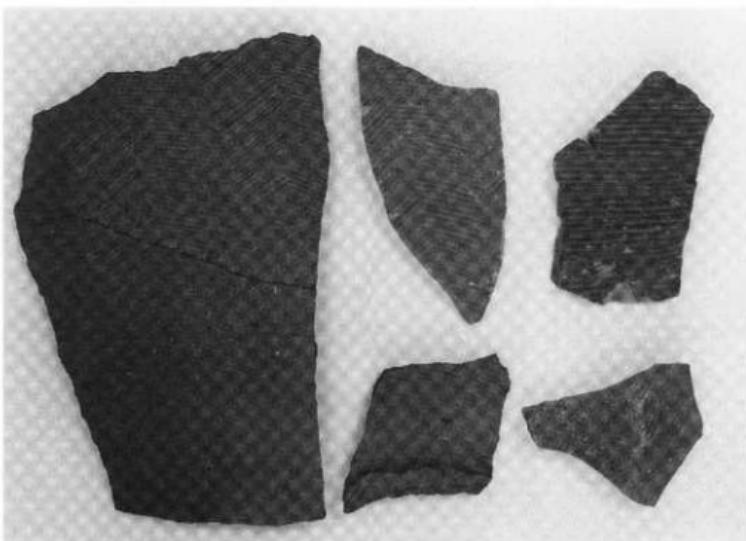
縄文土器



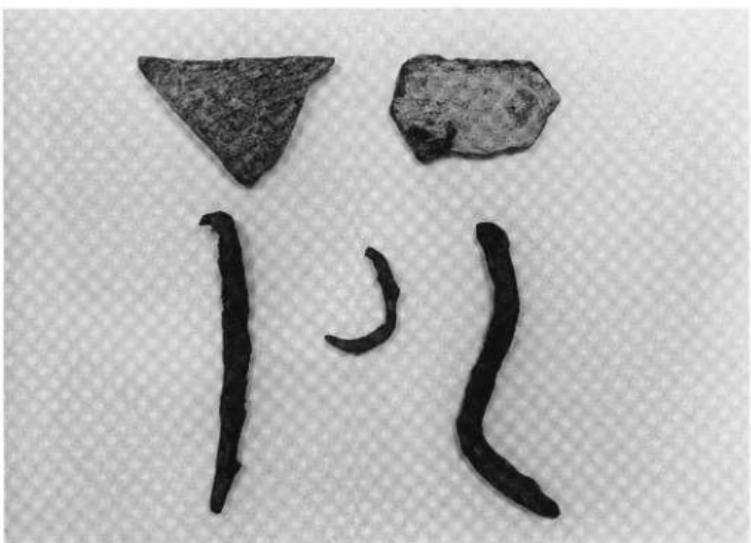
中世土器



珠洲



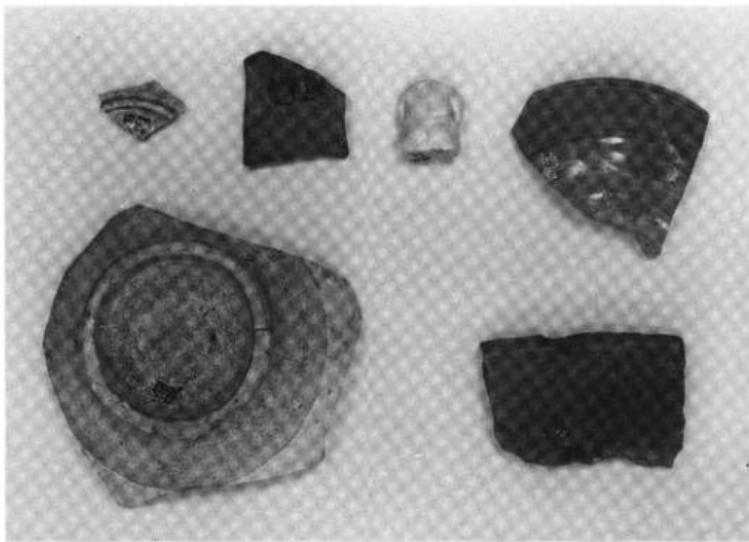
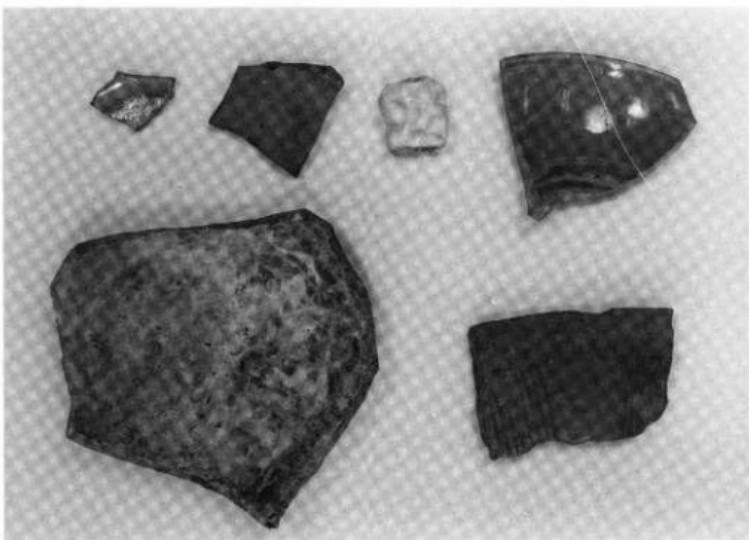
珠洲



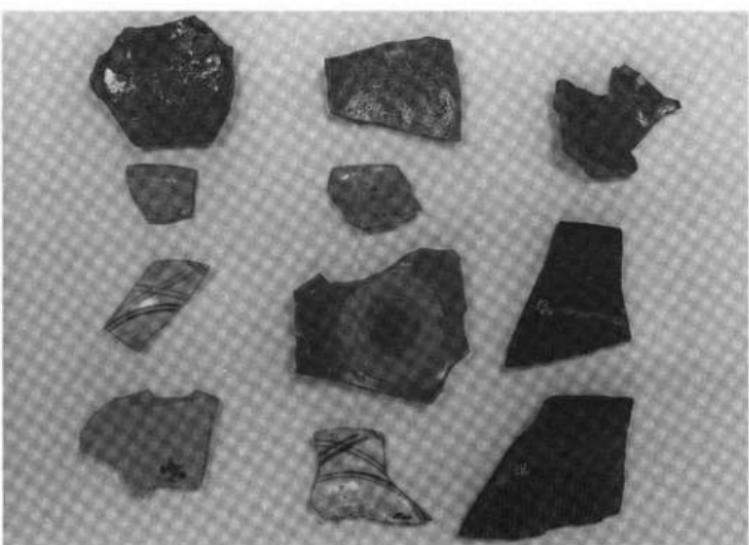
須惠器、土師器、鐵製品



青花、青磁



瀬戸美濃、越前、近世陶器



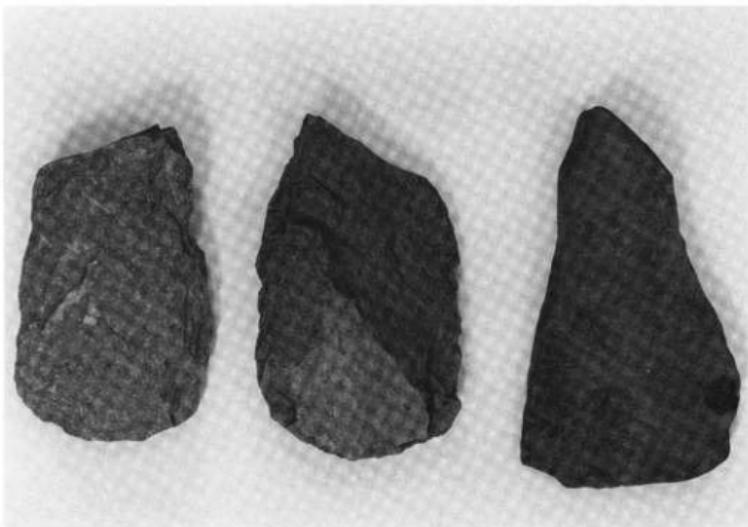
唐津、伊万里



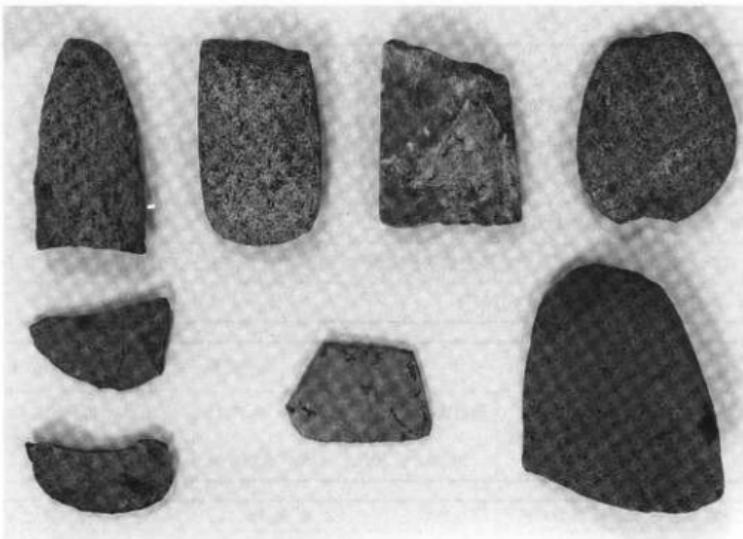
越中瀬戸



越中瀬戸



石 器



石 器

報告書抄録

ふりがな	やましたにいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	山下II遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
編集者名	麻柄一志、塩田明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	937-8555 富山県魚津市駅迦堂1-10-1 TEL 0765-23-1045
発行年月日	西暦1997年3月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
山下II遺跡	富山県魚津市 佐伯74外	市町村	遺跡番号 36度 47分 20秒	137度 24分 40秒	96.10.18 ~ 97.03.26	1,900	魚津滑川バイパス 建設事業に伴う発 掘調査

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山下II遺跡	集落遺跡	縄文、中世	土坑 ピット	純文土器、打製石斧、磨製 石斧、須恵器、土師器、珠 洲、青磁、瀬戸美濃、吉津、 伊万里、越中瀬戸	縄文後期から近世にいたる 集落

平成9年3月31日

富山県魚津市
山下II遺跡発掘調査報告書

編集・発行 魚津市教育委員会
富山県魚津市駅迦堂1-10-1
印 刷 新誠堂

